

紀要

沖縄埋文研究 7



論考

- 石器石材分析による遺跡評価の試み
－瀬底島アンチの上貝塚における人の営み－ 大堀 皓平 (1)

- 爪形文土器段階における石材運用
－野国タイプ型石斧の再定義と評価を中心に－ 大堀 皓平 (15)

資料紹介

- トリの餌入れとその用例について
－首里城跡及び首里城周辺出土品から－ 仲座 久宣 (29)

- 天界寺跡ほか出土の土器 西銘 章 (41)



2012年
沖縄県立埋蔵文化財センター



写真1 調査区全景



写真2 出土遺物 (土器)

古我地原貝塚（こがちばるかいづか）

古我地原貝塚は、うるま市石川伊波古我地原に所在する縄文時代中～後期の遺跡で、標高 60～70 m の琉球石灰岩丘陵上に位置する。昭和 58～59 年(1983～84)に沖縄県教育委員会が緊急発掘調査を実施したところ、台地上に縦穴建物跡や炉跡などの居住域が広がり、崖下に貝塚を形成するという当該期の典型的な遺跡立地形態が確認されるとともに、土器・石器・貝製品・骨製品・石製品・自然遺物などの多種多様な遺物が出土した。

土器は大半が奄美系と称される一群で占められ、奄美諸島との交流を考える上で重要である。また当該期の編年研究に寄与する資料も多数含まれている。石器は特に敲打器類が目立ち、貝製品は装飾品と考えられる小玉の出土量が豊富である。骨製品は漁具と想定されるヤス状の刺突具や、クジラやジュゴンの骨を用いた骨輪が得られている。石製品は勾玉状製品や蝶形骨器の祖型とみられる彫刻製品などがあり、往事の精神文化を示す貴重な遺物といえる。

なお、出土品のうち主要なものは平成 23 年 12 月に沖縄県の有形文化財（考古資料）に指定されている。

（新垣 力）



写真3 出土遺物 (貝製品・骨製品・石製品)



写真1 調査区全景（東区）



写真2 円弧状遺構（西区）

天界寺跡（てんかいじあと）

天界寺は、景泰年間（1450～56）に第一尚氏の菩提寺として首里城西側に創建された琉球有数の名刹である。明治以後は廃寺となつたため往事の様相は殆ど残されていないが、平成7～10年（1995～98）に沖縄県教育委員会（同寺跡東区・西区）と那覇市教育委員会（中区）が実施した緊急発掘調査により、多くの成果が得られた。以下に東区及び西区の概要を記す。

遺構は両地区で境内施設の一部と考えられる石垣・石列・石敷などが検出された他に、東区ではヤコウガイ蓋集中部やウマ埋葬土坑、西区では円弧状遺構が確認された。特に後者はグスク時代の建物跡と想定され、当地にかつて集落が存在した可能性も示された。

遺物は両地区とも14世紀後半～近代に至る多種多様な資料が出土している。最も多いのは陶磁器類で、他には円盤状製品・金属製品・ガラス製品・石製品・貝製品・骨製品・自然遺物などがみられる。特徴的なものとしては、瓦類破片からの製作工程が窺える煙管雁首や、門の両脇に配置されたと考えられる石製金剛力士像の一部などが挙げられる。

（新垣 力）

写真3 西区出土遺物（金剛力士像）



沖縄埋文研究

第7号

目次

卷頭図版

古我地原貝塚

天界寺跡

論考

石器石材分析による遺跡評価の試み

—瀬底島アンチの上貝塚における人の営み— ······ 大堀 皓平 1

爪形文土器段階における石材運用

—野国タイプ型石斧の再定義と評価を中心に— ······ 大堀 皓平 15

資料紹介

鳥餌入れとその用例について

—平成18～20年度首里城跡出土品から— ······ 仲座 久宜 29

天界寺跡ほか出土の土器

····· 西銘 章 41

タイトル・要旨の英訳(ABSTRACTS)は、石村 智(奈良文化財研究所)の指導・協力を得た。

石器石材分析による遺跡評価の試み —瀬底島アンチの上貝塚における人の営み—

An Attempt of Site Evaluation by Analyzing Stone Materials
- Human Activity at the Sesokojima-Anchinoue Shellmound Site -

大堀 翔平
OHORI Kohei

ABSTRACT : To evaluate individual characteristics of each site is an important issue about the studies of prehistoric Okinawa. The excavation of the Sesokojima-Anchinoue shellmound site offered ideal date enough to deal with this issue in the aspect of stone materials. In this paper I try a couple of new research methods to attain useful date from these raw stone materials, and I reveal that the Anchinoue shellmound site played a major role in the exchange of raw stone materials at that time. In addition, I try to reconstruct a social situation in the prehistoric Okinawa main island and the neighboring islands, in the perspective of the transformation of landscape around the Anchinoue shellmound site.

1. はじめに

調査された遺跡は、ただ事実記載された報告書が刊行されるのみでは満足なものではないだろう。その遺跡が存在する地域ないし時代の中にあってどのような役割を担ったのかを分析・評価してはじめてその価値が見出される。しかしこのような視点を加味して評価された遺跡は県内では際立って少ない印象がある。新里貴之は貝塚時代後期（弥生時代相当期）の遺跡に対し、弥生系遺物の出土を交易活動による富の集中と捉えることで、拠点集落という評価を与えた（新里 2001）。この仮説は沖縄の先史研究において、筆者の知る限りではじめて本格的に遺跡の評価について論じたものであり、該期社会に迫る意義深い内容であった。また新里は久米島町ウルル貝塚表採石器を取り上げながら、今後の課題として石器石材の重要性を高く評価し、先史時代の物流ネットワーク推定の重要な資料となり得るとも述べている（新里 2003）。ともに該期社会を素描する上で不可避な論点であり、高く評価される。これら新里の提言に対しては調査・報告において意識的に遺跡を評価し、それを蓄積していくことで検証がなされるべきであるが、管見の限りこれに応える意見が提示されていないのが現状である。

筆者はアンチの上貝塚出土の石器資料の整理を分掌する機会を得た。そこで上記のような問題意識をもって遺跡のもつ性格を評価するため、これまで当センターで行われてこなかった幾つかの分析方法を試みた。本稿はこの整理作業で行った幾つかの方法を紹介するものである。またその成果に対し石器石材獲得消費戦略、変形論（コア・リダクション）、景観、変化といった諸概念を中心圆理論に据え、アンチの上貝塚を舞台とした人間の活動について復元を試みた。

2. アンチの上貝塚の概要

アンチの上貝塚は沖縄県本部町瀬底島に所在する。瀬底島は本部半島から西に 630 m 隔てた離島で、総面積 2.99 km²、標高の最高点 7.6 m の隆起サンゴ島である。いわゆる低い島である。地質はほぼ第 4 紀琉球石灰岩に覆われ、島中央部の標高最高点付近で若干古生代石灰岩が認められる。そのため、後述するように

遺跡出土の石材はほとんど島外からの搬入であることが明らかである（図1）。遺跡は瀬底島東岸の海岸から一段高い段丘上に立地し、後背には石灰岩丘陵、前面はやや小さい海外砂丘が広がる。前面には本部半島が望めるが、その間には海峡が形成されて強い海流を生み、海岸砂丘前面のサンゴ礁は発達が弱い（写真1）。段丘上の立地であるため見晴らしはよく、南北に海を望むことができ、サンゴ礁の発達が弱いことで港湾としては良好な場所である。近年建設された瀬底大橋によって景観は大きく変化したが、それ以前は当時の古環境と概ね大きな違いはないようである。貝塚時代後期前半においては礁内の海産資源への依存度が高いことを背景に発達したサンゴ礁を前面とした海岸砂丘上に遺跡が立地するのが通常である。それを考慮するとアンチの上貝塚は特異な立地であるといえる。

遺跡の時期的には出土土器より繩文時代後期から貝塚時代後期前半（弥生～古墳時代頃）の遺跡で、特に尖底土器が主体の貝塚時代後期前半にピークをもつ。沖縄県立埋蔵文化財センターによって、2002年度に第1期調査、さらに2006・7年度の第2期の2期にわたって調査が行われた。調査範囲は合計633haで、遺跡範囲の全面を調査したとされている（図2）。第1期調査ではイモガイ科の集積が4基、敲石磨石集積が1基検出されている。さらに第2期調査ではフィッシャー内に廃棄物を投棄し続けることで小貝塚が形成されている特徴的な遺物出土状況が確認されている。また特筆すべき出土遺物には弥生土器・碧玉製管玉が挙げられる。これらの性格からみると、前述の新里の論でいう拠点集落の要素をもつつも全体的に小規模で廃棄場の様相をもつという、相対する性格を共有する遺跡である。

3. 出土石器の分析

言うまでもないことであるが、石器の抜き出し作業や所見・評価は、事実記載を心がけていても担当者の経験や癖、どのような作業を行ったかが少なからず反映され、客觀性が保証されるものではない。そこでアンチの上貝塚で出土した石器群を見る前に、どのような整理作業を行ったか紹介したい。なお第2期調査出土石器の整理作業では、先述のようにこれまで沖縄県立埋蔵文化財センターでは行われなかった幾つかの方



図1 遺跡周辺の地質（片桐ほか編 2009）

法を試みた。これは前述のような遺跡の更なる評価のためと、少しでも多くの情報を提示するためである。

①用語の整理

まず「石器」という用語についてだが、これには岩石に人為的な痕跡のみられる岩石の全てを指す広義の意味での石器と、道具に加工された狭義の意味での石器とに分かれる(加藤・鶴丸 1991)。当センターでは後者に対して「石器」とし、それ以外の礫(原石)を「石材」と区分してきた。しかしこの従来通りの用語では、石器抜き出しの際に多く認められた粗削片やフレイクを「石材」とすることになり、ここに従来からの用語の再整理が必要となった。そこで今次報告では、道具にまで加工されたものを「トゥール」とし、「石材」は全く加工痕跡のみられない礫を指すこととした。そして「石器」はトゥールを含む人為的な痕跡を残す全資料を指す、広義的な意味をもつ用語と捉えた。ただし報告文ではこれまで用いられてこなかった用語を使うことで混乱をきたすとの懸念から、節題は従来通りの用語を行い、文章内で新たな用語を用いることとなった。

しかし後述のように、従来通りトゥールのみを抜き出して「石器」として報告するのではなく、フレイクやコアのもつリダクション解明のための情報を疎かにすることになりかねない。今後は報告すべき「石器」をどの範囲にすべきか議論が必要である。

②石器の抜き出しと実測図

以前から指摘されているが、沖縄の剥片石器は本州にみられるほど定型的でなく、ラフな製作のものが多い。アンチの上貝塚においてもその範疇のものが多数を占めており、これをトゥールと認識し得るか、またトゥールとしても個別の器種に当てはめられるのか、大いに悩むものであった。そのため、今次の

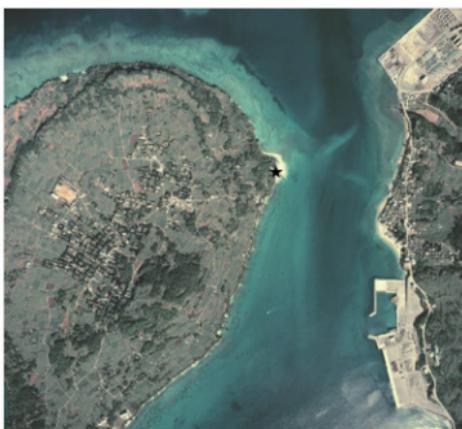


写真1 アンチの上貝塚周辺の空撮写真



図2 調査区位置図（片桐ほか編 2009）

報告では僅かでも人為的な痕跡と見なし得る箇所が認められるものは全てトゥールとして認識した。

県内の報告書では、石器、特に剥片石器の実測図の描写について明確な規則があるわけではないようだが、少なくとも当センターでは本土では一般的であったリング・フィッシャーの抜けた実測図であった。しかし上記にあるように抜き出された石器の中には偽石器の可能性のあるものも含まれるので、特に意識して後日第三者によって再検証が可能な図を用意する必要があった。また①に指摘したように、出土したトゥールの剥離工程などのリダクションの痕跡を少しでも多く図示する必要があり、これまでの実測図ではそれが果たせないのは明らかであった。そこで今次報告の実測図は既刊のマニュアルを参考に（加藤・鶴丸 1991、田中 2004）、リング・フィッシャーや自然面の描写を入念に行った（図3）。自然面と加工面との明確な描き分け、剥離面同士の新旧関係や敲打痕・研磨痕の新旧関係など、加工の痕跡が図示された実測図となった。

③フローテーション

これは筆者の提案した作業ではないが、小貝塚の埋土を回収し、ウォーターフローテーションによって微細な遺物の抜き出しを行った。この作業によって微細な石器も多数得られ、従来取り上げられなかった小形のフレイクやチップが多数得られた。この作業の重要性は小田静夫が指摘するところである（小田 2000）、碧玉製管玉が土壤サンプル中より得られたことは、フローテーション作業の重要性が再確認されるエピソードとなった。フローテーションを行うことで、従来見逃していた石鏃や黒曜石剥片・チップなどの小型石器も得られる可能性があり、今後不可欠の作業といえよう。

④石器の全点鑑定

当センターでは、従来トゥールに限定して岩石学的鑑定を依頼し、同定を行ってきた。この作業でトゥールに用いられる石材については十分なデータが得られる。しかし遺跡にどれだけの種類の石材をどれ程の量持ち込み、それらのうちどの石材が石器素材に選択されてきたのか、この答えを得るためにトゥールを含めた出土礫の全点鑑定が必要であった。ただし、遺跡内において調査者が回収する石材を取捨選択してしまうれば、その時点で遺跡内に持ち込まれた全石材とはいえない上、調査者の力量に大きく左右されてしまう。その点で出土礫を全点取り上げ、さらにフローテーションで微細石器まで回収した今次アンチの上貝塚調査

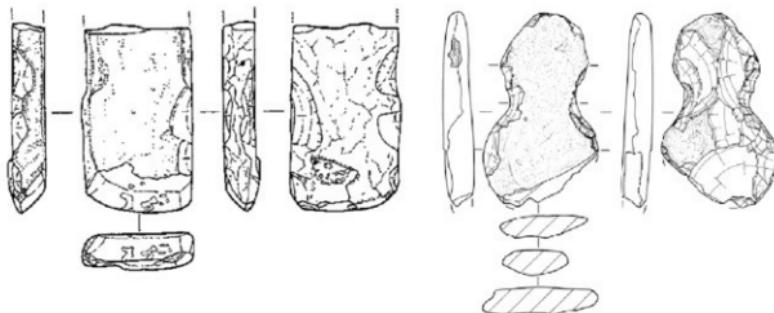


図3 変更された実測図

左：第1次アンチの上貝塚出土磨製石斧（盛本ほか編 2005）

右：第2・3次アンチの上貝塚出土打製石斧（片桐ほか編 2009）

は、この作業を行う上で理想的であった。

今次調査で回収された礫はトゥールを含めて 1,822 点にも及ぶ。これらを神谷厚昭氏に無理を言って鑑定して頂き、この作業は丸 3 日に及んだ。しかしこの作業の結果、後述するように久米島や渡名喜島に産出する石材、そして県内では産出しない安山岩、長崎県松浦近辺産と想定される玄武岩質溶岩礫が確認された。

琉球列島のような島嶼環境では、遺跡に搬入される石材が在地であるか遠隔地ないし外来であるかの判断が容易であり、このような分析・研究には適した条件をもっている。今次調査のような成果も期待されるため、可能な限り全点分析を行うべきだろう。

⑤トゥール外石器の全点観察及び組成比の統計作業

全点分析により出土した岩石は 40 種類にも及ぶことが分かった。しかしそのうちトゥールにまで加工され使用・廃棄された石材は両期調査を合わせて 16 種で、多くの石材が石器に加工されることもなく廃棄されたことが分かった。そこで選択されなかった石材にはどのような作業が行われた結果廃棄されたのかを検討するため、これらを 1 点ずつ観察していった。この作業では礫を原石、半割、粗割、粗割片、フレイク、チップ、トゥールに分類していった¹⁾。この作業には 2 ヶ月もの時間を要した。

しかしこの作業の成果は大きく、遠隔地石材や琉球列島外の石材であっても近在の石材と同様に半割・粗割・粗割片といった粗加工段階で廃棄されたものが最多であること、同じ岩石でもトゥールまで加工される礫とは石質が異なることが理解された。^③、^④の成果の重要性から「石器」とは別に「石器石材」という項目も用意し、紙幅を多く割いて報告した。しかし半割・粗割や粗割と粗割片の識別の意義に疑問点を残しており、方法には改善点も多いと思われる。

⑥接合作業

報告書にも課題として挙げた作業であるが、石材搬入からトゥールに至るまでの石器製作工程の復元、またどの工程がアンチの上貝塚において行われたのかという石器製作上での場の機能の把握という 2 つの課題に対し、最も有効な作業が接合作業である²⁾。この作業は報告書寄稿後の 2 週間に限られたため、遠隔地石材とチャートに限定した。その作業内容と結果については後に詳述するが、結果としてチャートの粗割片同士の接合資料が 5 点得られた（写真 2）。

4. アンチの上貝塚の石器・石器石材

以上のような整理作業を行った結果、第 I 期から第 II 期まで出土したトゥールは石核を除いて 92 点である。まず石器の出土状況であるが、唯一の例外である敲石磨石集積を除いて集中的に出土する箇所はみられず、包含層中に散布していた。小貝塚内からも多く出土しているが、特定の器種や石材が集中するような小貝塚は認められない。他の遺物と同様に廃棄されたとみられる。また接合作業によって得られた接合資料は、異なる小貝塚で出土したもののが接合したものであった。土器の年代差もみられないため小貝塚に考古学的な時間差は認められない。続いて器種ごとに石器をみてみたい。まず剥片石器であるが、この中には石器の未製品と思われるもの、石錐、R F がみられた。これらはいずれも節理面の発達の少ないチャートを素材としており、それを順序が不規則な押圧剥離によって調整されている。このような簡素な剥片石器製作は曾畠式土器の段階から奄美・沖縄本島諸島でみられる。貝塚時代後期にはあまり報告事例はないが、実際は恒常に使用されていたと思われる。一部には例外的な規則的剥離によって製作される石匙や打製石器があることから、この差異によって在地で製作されたものか九州島から製品搬入されたものかを区別することが可能ではないかと筆者は考えている。チャートを素材としたトゥールはこのような剥片石器類より石核の方が



写真2 第Ⅱ期アンチの上貝塚接合資料

数字は遺物番号 順不同

多い。石核は第Ⅱ期報告において多数見出されたが、これは担当者の違いによるとみられる。平坦な自然面を打面とし、前後左右から直接打撃によって剥片が作出されている。これに対応するようなフレイクも僅かに出土しており、打面が残る一部のフレイクは自然面を打面としているもののが多かった。なおアンチの上貝塚では石核に比べてフレイクの数量が極めて少ない。これは作出されたフレイクが遺跡外に持ち出された可能性を示唆している。この認識は後述する遺跡の評価に大きく関わっている。

打製石斧は2点認められている。1点は頁岩を利用した分銅型打製石斧、もう1点はチャートを利用した打製石斧である。本来刺突具や刃物に用いられるチャートであるが、チャート原産地周辺に位置する本部半島や伊是名島・伊平屋島ではしばしばチャートが敲石に用いられる辞令がある。この打製石斧もそれと同じ文脈に位置付けられよう。磨製石斧は12点出土している。石材には変斑レイ岩・緑色片岩・緑色岩・変輝隕岩・変質安山岩・砂岩と多様な素材が用いられ、さらにシャコガイ科貝殻を利用した貝斧も1点みられる。該期になると点数の減少や粗製中心になることが理解されているが（大堀 2008）、それでもメンテナンスを繰り返しながら使用されるため、該期にも遺跡中に1・2点は鋭利な刃部を残す製品がみられる場合が多い。この遺跡の磨製石斧も粗製ばかりであったが、両調査を通じて完形は3点のみで、ほとんど損耗したものばかりであった。このことからも出土石器が使用後に廃棄されたものであることを窺わせる。敲石磨石類はいわゆる石礫状で、表裏面に研磨面がみられ周縁と表裏中央部に敲打痕の残る典型的な複合的機能をもったものである。中粒砂岩を石材にしたものがほとんどである。

石器組成は敲石磨石類が中心で、利用される石材も敲石磨石素材である砂岩が主体となっている。このような石器群のあり方は貝塚時代後期前半の典型的な特徴といえるが（大堀 2006）、チャート製剥片石器が多いのはこれまで該期では認められなかった。ただし出土土器は縄文土器から貝塚時代後期土器までが同一層・小貝塚から出土している。打製石器の未製品などは縄文時代の石器である可能性が高い。

他方、この遺跡の調査ではトゥール以外の礫についても全点が取り上げられている。人為的な取捨選択という網の目を通過することなく「平等」に取り上げられているという好条件から、整理作業ではトゥール以外の礫を含めた石材の全点鑑定を行った。その結果は表にみられるように（表1）、トゥールは僅かでほとんどが粗削された破片であることが分かる。また石材組成をみると、トゥールにみられる石材組成と大きく異なり、チャートが最も多く閉める石材であることやトゥールにはほとんど用いられない古生代石灰岩の大量搬入、遠く久米島・慶良間諸島・渡名喜島やさらには九州からも安山岩や玄武岩質溶岩が搬入されていたことが認められた。またこれら礫は自然礫以上に粗削されたものが多くを占めることが認められたのである。よって、第Ⅱ期調査範囲だけでも1,822点、総重量約314kgの石材が、僅かなトゥールとともに搬入されているのである。

5. 石器石材の産地と搬入形態

具体的な石材について述べる前に、まずは考古学な石器石材の分類について考えてみたい。從来、石器石材の表記や分類は、基本的に地質学者に鑑定・指導を仰いでいる。しかし実際には肉眼同定という制約や変成作用の評価などから学者間でも一致しないことがあり、岩石学的な分類を用いることが必ずしも客觀性を証明することにはならない。また遺跡によっては多数の岩石名が列記されて把握が困難になる場合が多い上、集成していくと多種に上ってしまい扱いに困ることも多い。沖縄本島の場合は現在84種にも上る。地質学的な石材同定は、石材産地の推定から活動域や交易などを考察する上で参照となるだろう。しかし同一の岩石であっても石質には大小の差異があり、当時の人は岩石を現代的な同定で選択していたわけではなく、色・光沢感・割った感触などの五感によって選んでいたはずである。従って遺跡に持ち込まれた石材を余すことなく提示するには効果的であるが、石器製作の素材として考える際には岩石学的な分類を考古学的にア

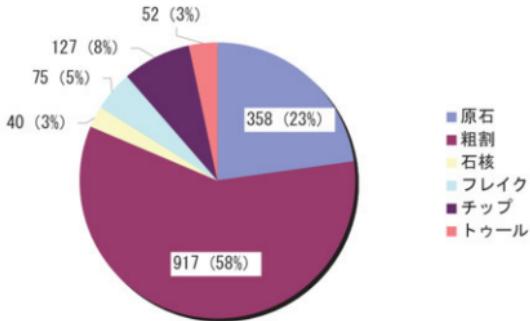


表1 第Ⅱ期調査出土石器・石材の内訳

レンジする必要がある。前者に基づく分析は「事実記載」を旨とする報告書において行ったので、本稿ではより考古学寄りの後者の方法で考察してみたい。そこで今回は石質と産地から石器石材の分類を試みた³⁾。まず石質Ⅰを緑色岩系、斑レイ岩、蛇紋岩といった硬質で粗粒、粘性がある岩石とした。石質Ⅱは頁岩系、千枚岩・片岩・片状岩など、細粒で粘性があり、剥離しやすい岩石とした。石質Ⅲは硬質で粗粒だが、粘性がない岩石とし、中粒・硬砂岩系、砂質系岩、安山岩などが該当する。石質Ⅳは硬質で細粒、珪質分をもつ岩石とし、珪質泥岩、珪質頁岩、粘板岩、チャート、ガラス質安山岩、黒曜石などが当たる。石質Ⅴは軟質な岩石で、泥岩、凝灰岩、サンゴ石、軽石などが該当する。また石質Ⅵにはヒスイや玉・蠍石といった鉱物的な岩石とした。一方産地からの分類は拙稿で分類案を提示している（大堀 2006）。琉球列島外に産地をもつものとしてF群（Foreign Group）が設定され、これは琉球列島の島という地理的特徴により生じるものである。なおこの点こそ石器石材研究の対象地域としての該地がもつ好条件でもある。これには黒曜石・ヒスイなどが当たる。次にW群（Wide Group）で、これは沖縄本島と近隣の離島で得られるが遺跡遠方でおかつ産地が局地的なものとして設定した。W群は緑色岩系・斑レイ岩・頁岩・安山岩・グリーンタフ・チャートなどが代表的である。そしてN群（Near Group）は遺跡近隣で広域に分布する、砂岩・泥岩・石灰岩などが主な例となる。石質と産地の2大別を組み合わせ、WⅠ・WⅡ・WⅢ・…というように分類した。

W群を慶良間諸島・渡名喜島・久米島の石材とすると、アンチの上貝塚ではFⅢ 2点、FⅥ 1点、WⅠ 2点、WⅡ 42点、WⅢ 2点、WⅤ 1点、WⅥ 4点、NⅠ 56点、NⅡ 74点、NⅢ 298点、NⅣ 822点、NⅤ 329点の内訳である（表2）。表のように、最も多かったのはNⅣで、剥片石器類の石材となるチャートである。このチャートには青白色と赤チャートの2種類がみられた。大多数を占める青白色チャートは、対岸の本部半島西岸の与那嶼層、その北にある伊是名島・伊平屋島に求められる。また赤チャートは瀬底島北西の伊江島で特徴的にみられる。いずれにしても比較的遺跡近隣から持ち込まれたとみられる。次いで多いNⅢ群は、嘉陽層砂岩と古生代石灰岩が主体である。嘉陽層砂岩は中粒で青灰色が特徴で、近隣では恩納村から名護市にかけての海岸部で採集でき、敲石・磨石・石皿・砥石などの多彩なトゥールに無加工のまま用いられている。この石材は貝塚時代後期において上記の礫石器を中心に一部磨製石斧にも利用される、該期で主体となる石材である。一方古生代石灰岩は本部半島で容易に獲得できるが、硬質すぎるため剥離によって石器を製作するには困難な石材である。そのためかトゥールは1点のみであった。この石材が組成上多いのは全時代

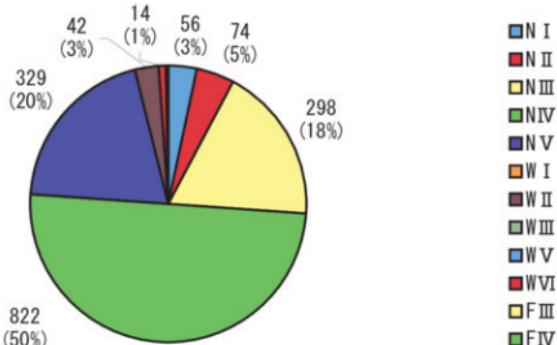


表2 第Ⅱ期調査出土石材の内訳

を通じてこの遺跡のみであるが、これは取り上げ方法の違いが反映されたものと思われる。また磨製石斧の石材に1点のみみられる変質安山岩も本部半島北岸・南岸で得ることができ、これも遺跡近隣で獲得することが可能である。N Iの緑色岩・輝綠岩・緑色片岩といった緑色岩系は、遺跡近隣では本部半島西岸の與那嶼で産出する。先史を通じて磨製石斧石材として重用される石材である。この遺跡でも磨製石斧と敲石に使われるが、磨製石斧の研磨は部分的に原石形状を留めるなど、準粗製というべき製品である。さらにトゥール以外の石材は小形で石器に加工するには厳しいものであった。このようにトゥールの石材はいずれも遺跡近隣で獲得できる石材が用いられている。古生代石灰岩を例外とすると、石質Ⅲが後述する石質Ⅰに優越し、簡易的な石器製作を行われるなど、貝塚時代後期の特徴通りといえる。

一方でトゥールに加工されていない石材の中には遺跡遠方の石材であるW群やF群がみられる。W VI結晶質石灰岩・W IIIホムンフェルスは渡名喜島、W II片状砂岩は慶良間諸島、W I流紋岩・W I輝線凝灰岩・W IVグリーンタフ・W V凝灰岩は久米島に原産地がほぼ特定されている。さらに琉球列島には産しないF群には、琉球列島のものと石質の異なる安山岩（F III）や佐賀県松浦原産と推定される玄武岩質溶岩（F III）の粗削礫も認められた。これまでF群の石材は、縄文時代後期後半から晩期にかけてF IVの主に腰岳産黒曜石が原石なし粗加工状態で琉球列島に搬入することが知られるが（小田2000、小畠2005）、貝塚時代後期には磨製石鎌や方形片刃石斧などが成品搬入される事例のみであった。F群石材の搬入については再考の余地があるといえよう。しかし本来貴重であるはずのF群石材に対しても、N群と同様に粗削で廃棄されている。

神谷厚昭氏の指摘や既存の地質図、岩石図鑑を参考に遺跡出土石材の産地を調べていくと（木崎編1985、神谷1985）、当時アンチの上貝塚に集った人々は上記にあるような広域に分布する石材を集め、その中からトゥールに適した石材を選択していたことを窺わせる（図4）。さて、具体的に石材はどのように吟味されていたのだろうか。この答えと思われる情報もこの遺跡には「包含」していた。遺跡出土の石材は、上述したようにチャートが最も多く、次いで砂岩、古生代石灰岩とランクeringされる。しかしトゥールに使用されるチャート・砂岩に対して、古生代石灰岩は何故か多量に本部半島から搬入しながらトゥールに用いられないものである。この疑問は石器に加工されなかった礫に答えが隠されていた。トゥール以外の礫を1点ずつ観察していく結果、チャートもトゥールや石核、剥片まで加工されているのは節理面の少ない良質のチャートであり、それ以外の802点中703点のほとんどが節理割れを起こしているものや、多くの節理面をもつ

ている岩石で、原礫もしくは粗削で廃棄されていることが理解された。2日間のみの試験的な接合作業において3点の粗削同士の接合資料が得られているが、やはり節理面が多く節理削れを起こしていた（写真3）。これら接合資料からも粗削が遺跡内でも行われ、トゥールまで加工されない石材が粗悪な石質であることを支持している。この粗削の仕方や原石形状は古生代石灰岩も近しい状態であった。またチャートと古生代石灰岩の中には肉眼観察では判別の難しいものもあり、今日でも希塩酸によって識別されている。この状況を踏まえると、チャートと古生代石灰岩とは区別されることなく搬入され、遺跡内の試し割りを通じて良材が吟味されていたと想定される。チャートの場合はフレイクの出土数が少ないとからみて、良材は消費地において製品に加工されていたと推定される。チャートと古生代石灰岩だけでなく、第1次調査を含めてアンチの上貝塚ではほぼ全ての種類の岩石において粗削が認められる。アンチの上貝塚では石器石材の選択において非破壊では良悪が判断できない場合、試し割りを行うことで選別が行われていたと考えられる。彼らは肉眼的な判別だけでなく、試し割りも含めた五感全てとこれまで石器製作を行ってきた経験則とを総合して石材選択を行っていたのである。

5. アンチの上貝塚の景観とその変化

アンチの上貝塚の石器群・石器石材の特徴は理解された。これを踏まえてアンチの上貝塚の往時の景観について考えてみたい。

この遺跡に人間の痕跡がみられはじめる縄文時代後期頃は、この場所が貝塚時代後期前半に活性化するような社会的・経済的特性は有しておらず、遺物の出土状況からみて偶発的なキャンピングサイトであったとみられる。この時代背景を石器石材からみると、縄文時代後期から晩期は剥片石器石材として好まれるチャートや磨製石斧石材として好まれる緑色岩といった産地が限定的な石材であっても、沖縄本島諸島全体で大量に行き渡る時期であったとみられる。これら石材は原石搬入も多く、また原産地付近と消費地の遺跡で量的差異が認められないことから直接搬入の可能性が高い。また晩期には高嶺遺跡や仲原遺跡に代表されるような典型的な拠点集落の様相をもった遺跡も出現する。拠点集落には黒曜石や糸魚川産の翡翠製品も出土するなど富の集中する様相が認められる。アンチの上貝塚には縄文時代晩期の営為は全く認められないが、その背景には晩期においては拠点間での物流を中心で、交易の特化した場所を必要としなかったことが大きいと考えられる。

詳細な報告書が刊行されているので敢えてこの遺跡が交易拠点として考えられる詳細な根拠を述べないが、沖縄本島諸島が尖底土器を用い始める貝塚時代後期前半期、特に浜屋原式土器段階にアンチの上貝塚は交易に特化した場所として活性化する。大量のチャートからみてこの場所に本部半島周辺に生業範囲をもつ集団が主催者と考えられる。そこに名護・恩納村東岸部、久米島、慶良間諸島・波名喜島といった沖縄本島諸島の他地域の集団が各々の生業範囲で得られる資源を手に訪れていたとみられる。

この目的は沖縄本島諸島の集団間での交易もあったと思われるが、それ以上に九州島あるいはその中継を担う者たちが携えてくる異邦の品々であった。これらは品定めが行われ、気に入った品々が各々の集落へと持ち出されていったのである。アンチの上貝塚の場合、交易の行われるその幾日かの間の短期的な居住のために食料や道具が持ち込まれ、その残滓や破損してしまった道具、試し割りの残滓や売れ残り、剥片剥離後の石核などがフィッシャー内に片づけられていった。島内ではみられない魚骨やイノシシ骨、石材、碧玉製管玉の小貝塚内からの出土はこの痕跡であるとみられる。この廃棄行為が何度かの交易活動によって累積していくことで、8基のフィッシャーは次第に小貝塚を形成するに至っている。場合によってはサンゴ礁で覆って隠しているが、これは見てくれる問題なのか、何らかの習俗的な行為なのか判断する術をもたない。

その後アンチの上貝塚は、大当原式土器の頃から翳りがみえ始め、くびれ平底土器が主体となっていく貝



図4 石器石材の供給元



写真3 チャートにみる石質による消費の違い
左上：石核 左下：フレイク 右：接合された円錐の粗削片

塚時代後期後半には人間の痕跡が全くみられない状況へと変貌していく。この場所を舞台とした 3000 年間の様々な変化を、現状の考古学的痕跡からは僅か 4 段階の変遷でしか辿ることが叶わない。しかしこの大まかなアンチの上貝塚の盛衰の過程は、やはり南島産貝交易を抜きにしては考え難い。遺跡の主体が浜屋原式土器段階という限られた時期というのは示唆的である。他方この時期の石器・石器石材からみると、縄文時代晩期に対して打製石器製作とそれに伴う黒曜石搬入の途絶、磨製石斧は点数が減る上に選択石材に在地や敲石磨石類石材が増加や作業工程も省略が多くなるなど、石器製作は粗製が主体化する（大堀 2006、2009）。このような石材選択の変化は、石材獲得行動が縮小されたことや地域集団間での領域意識が強化されることによって安定的な石材確保ができなくなったことなどが要因に考えられる。アンチの上貝塚において認められる石材の大量搬入は、石材の直接搬入が厳しくなったことを受け、石器に良好な沖縄本島諸島内の特定産地の石材が、価値ある商品として交易システム上に加わったことを示唆しているのでないだろうか。アンチの上貝塚は南島産貝交易とともに石材交易の場としての機能も停止することになるが、これは沖縄本島諸島内での物流ネットワークと南島産貝交易とが同じ物流上の線上にあったことを窺わせる。また該期にはアンチの上貝塚の所在する瀬底島以外にも、伊江島・伊是名島・久米島など沖縄本島諸島の離島に所在する遺跡に九州弥生文化に由来する品々が出土する傾向にある。これら遺跡はその遺構・遺物の包含する全域を発掘調査されたわけではないので、その評価が新里の述べる拠点集落であるか交易拠点であるか評価し得ない。しかしこのような該期における離島遺跡の特徴からみて、東シナ海側の離島という景観が九州・琉球列島内を貫く物流ネットワークに対して大きな役割を果たしていたと考えられる。

アンチの上貝塚は貝塚時代後期後半になると全く人間の痕跡がみられなくなる。この状況はアンチの上貝塚に限らず、沖縄本島諸島の東シナ海側にある離島は久米島のみを例外にいざれも同じ状況になっている。この時期には土器様式が沖縄本島諸島様式の尖底から奄美諸島様式のくびれ平底へと変化するが、この大きな変化の背景には、高梨修が論じるように南島産貝交易の終焉と奄美諸島を中心としたヤコウガイ交易への転換という、琉球列島内での社会状況の変化の中に求められよう（高梨 2005）。

5. おわりに

アンチの上貝塚は、南島産貝交易を背景に離島という景観において繁栄した、交易活動に特化した場と評価される。本稿のような取り組みに対しては、実証的な立場から言えば机上の空論と一蹴されるかも知れない。しかしながらそれは筆者の力量に問題である。現場を調査し、整理して報告するまでは行政内研究者が担っている。その中で、遺跡のもつ特徴を少しでも多く引き出すための方法論的な模索と、その成果に基づいた遺跡の評価やそこにおける人間の営みを論じていくことは調査担当者の目指すべき目標ではないだろうか。本稿はその実験的な試みである。至らぬ点も多いと思われるが、多くのご意見が頂ければ幸いである。

（おおほり こうへい：調査班 専門員）

なお、本稿は 2009 年 10 月日本人類学会において発表した内容を加筆・修正したものである。当センター片桐千亜紀氏には第Ⅱ期調査報告に参加させて頂き、整理・分析作業から発表までご指導を頂きました。石豊研究所の神谷厚昭氏には石材の同定をはじめ観察方法や産地についてご指導を頂きました。浦添市教育委員会の菅原宏史氏とは何度も遺跡の評価について意見交換を行うことで、構想を固めていくことが出来ました。琉球大学医学部土肥直美先生には、ご指導頂くだけでなく日本人類学会での発表の機会も賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。また作業を一緒に行ってくれた当センター文化財調査嘱託員の瑞慶覧長順氏、初めてだらけの整理作業を遺漏なくこなしてくれた整理作業チーム一同にもこの場を借りてお礼申し上げます。

注

- 1) もっとも、これら分類のうち半割と粗削を分ける有効性は大して得られなかつたため、混合してもよいと考えられる。
- 2) この接合作業は土器などでも行われる所謂破損接合のことではなく、剥離面同士を接合する作業を指す。この接合作業は、国内では埼玉県砂川遺跡を嚆矢に、北海道白滙遺跡群などで石器製作工程の復元や、場の機能の復元に大きな成果を上げている。
- 3) この石材の分類案は、2008年8月の沖縄考古学会定例会において発表したものである。そのためテーマとした磨製石斧に重点を置いた順番となっている。これを石器全体に反映させた分類を用意することが今後の課題である。

参考文献

- 小田静夫 2000.10 「沖縄の剥片石器について—チャート・黒曜石製細小石器を中心に—」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）』 p55 – 77 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 大堀皓平 2006.6 「先史沖縄人の在地性—繩文時代後晩期から弥生時代中期併行段階における石器石材—」『南島考古』 第25号 p1-10 沖縄考古学会
- 大堀皓平 2008.3 「先史沖縄島の磨製石斧製作—「粗造の感」の石斧について—」『國學院大學大學院紀要－文学研究科－』 第39輯 p265 – 278 國學院大學大學院
- 片桐千亞紀・西路章・山田浩久・皆原広史・大堀皓平・黒住祐二・樋泉岳二編 2009.3 『瀬底島・アンチの上貝塚－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告－』 本部町文化財調査報告書第9集 本部町教育委員会
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1991.3 『図録石器入門事典 先土器』 柏書房
- 加藤祐三 1985.9 『奄美・沖縄 岩石・鉱物図鑑』 新星図書出版
- 木崎甲子郎編 1985.9 『琉球孤の地質誌』 沖縄タイムス社
- 新里貴之 2001.6 「物流ネットワークの一側面—南西諸島の弥生系遺物を素材として—」『南島考古』 第20号 p49 – 66 沖縄考古学会
- 新里貴之 2003.3 「貝塚時代後期石器研究への予察—久米島ウルル貝塚採集石器を素材として—」『久米島自然文化センター紀要』 第3号 p1 – 11 久米島自然文化センター
- 高梨修 2005.5 『ヤコウガイの考古学』 ものが語る歴史 10 同成社
- 田中英司 2004.9 『石器実測法 情報を描く技術』 雄山閣
- 盛本勲・安座間充ほか編 2005.3 『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』 本部町文化財調査報告書第8集 本部町教育委員会

(2010年3月上梓)

爪形文土器段階における石材運用 －野国タイプ型石斧の再定義と評価を中心に－

The Utilization of Stone Materials in the Phase of the Tsumegatamon-style Pottery
- Redefinition and Evaluation of the Noguni-type Stone Adze -

大堀 鮎平
OHORI,Kohei

ABSTRACT : In the paper I study stone tool industries in the phase of the Tsumegatamon-style pottery. It has been considered that these assemblage has a distinctive characteristic that is different from the counterparts in other periods. Especially, edge-polished stone adze in the assemblages shows characteristic designs and distinctive manufacturing technique. Then I tentatively define it as the "Noguni-type stone adze".

In this phase, there was a variety of the assemblages in the light of presence and absence of the Noguni-type stone adze and chert materials. This implies that the people used a variety of localities for procuring raw stone materials. The industries in the phase of the Tsumegatamon style pottery were characterized by the distinctive ways of procuring and reduction of stone materials. Because of the peculiarities in the industries during this period, I tentatively define it as the "Pre-Ryukyu Jomon style industry", and point out the possibility that this tradition was not succeeded by the following "Ryukyu Jomon style industries".

1. はじめに

沖縄本島諸島において本格的な石器製作がみられるようになるのは、縄文時代早期に相当する爪形文土器の時期である。この時期の石器群は、全面研磨の磨製石斧がみられないことに加え、打製石器類が石器組成から欠如するなど周辺地域や前後の時期との類似性が認められない点に特徴をもつ。そこで本稿ではこれまでに報告されている遺跡から出土する石器を対象にその石材運用とそれに伴う石器製作技術を分析し、該期石器群の特色についてより具体的に明らかをしていきたい。

2. 爪形文土器段階の遺跡より出土する石器（図1・2）

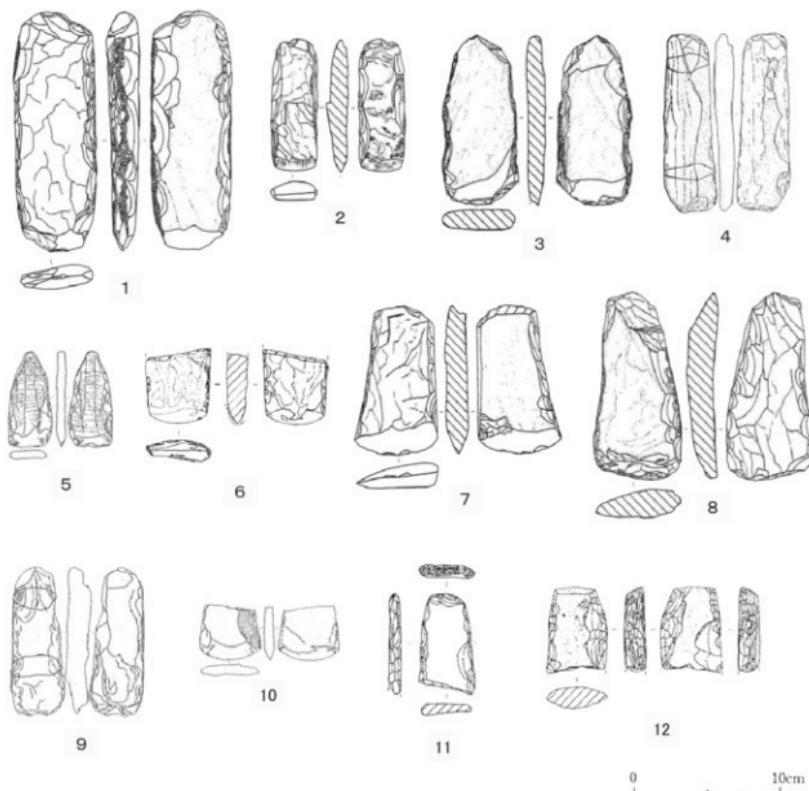
2-1 読谷村渡貝知東原遺跡

この遺跡は低平地に立地し、下層に爪形文土器を主体とする層、上層に曾畠式・室川下層式などの条痕文系土器を主体とする層とに分かれている。自然遺物にはリュウキュウイノシシが卓越し、ほかに貝・魚骨が出土している。年代値については、炭化物・貝殻を試料に 6450 ~ 6670B.P という放射性炭素年代測定値が得られている。下層出土の石器には、石核、縁辺に不規則な微細剥離を伴うチャート製のスクレイバーや尖頭器、大型の打製石斧、刃部磨製の石斧、敲石類の計 7 点が出土している。ただしチャート製品については上層での出土が主体的であるので、巻き込みによる可能性が高いと考える。またイノシシ骨製の骨錐も得られている。

大形の打製石斧は 2 点得られている。1 は 30 cm 弱で、板状礫を素材としている。図1-4 は周縁を直接打撃によって剥離調整が行われ、両側面には鋭い稜が形成されている。同図 9 も同様で、片側面は欠損しているが、残る右側縁はやはり鋭い稜が形成されている。同図 5 の刃部研磨の石斧も板状の礫を素材と推定され、大形の打製石斧と同様に側面の稜が鋭く調整されている。刃部には刃縁に対して垂直方向に線条痕が残されるため、機能は横斧であると想定される。石材はいずれも縄泥片岩と報告されているが、管見の限りでは他の報告書にある緑色千枚岩・片岩と同じ岩石である。

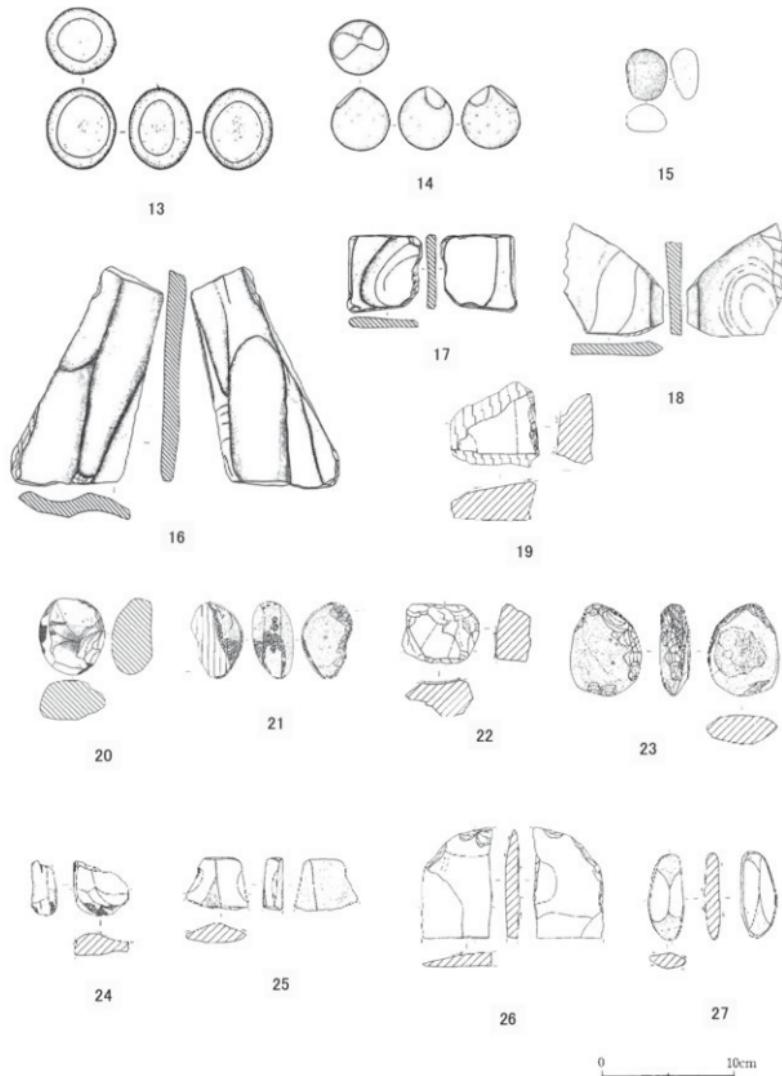
2-2 嘉手納町野国貝塚B地点

海岸砂丘に立地する。この遺跡でも爪形文土器と条痕文系土器が合わせて約4000点という膨大な量が、渡具知東原遺跡と同様に出土量のピークとなる層が層位的に分かれた状態で出土している。またこの遺跡では爪形文土器が主体となるVb層から間層を挟んだV層に無文土器が出土している。放射性炭素年代測定値では、無文土器が出土したV層が 7130 ± 80 y.B.P.、ヤブチ式が出土したVb層が 6250 ± 150 y.B.P.という測定結果が得られ、爪形文土器より古手の上器という認識がなされている。爪形文土器の層からの自然遺物にはリュウキュウイノシシ骨が卓越して多く、他に貝・魚骨などがみられる。石器には30cm近い大形品を含む刃部磨製石斧、石斧様石器、敲石類・石皿B式・砥石などがみられ、爪形文系が主体のIV・V層



1・2・3・7・8・13・14・16～18・20・21：野国貝塚B地点
4・5・9・10・15：渡具知東原遺跡
6・11・17・19・22～27：新城下原第二遺跡

図1 爪形文土器段階の石器（石斧）



13・14・16～18・20・21：野国貝塚B地点
15：渡具知東原遺跡 17・19・22～27：新城下原第二遺跡

図2 爪形文土器段階の石器（敲石類、砥石）

では 44 点が出土している。また渡具知東原遺跡と異なり野国貝塚では石器中で石斧が最も多く 17 点が得られている。

この遺跡から出土した大形の刃部磨製石斧は正面に割り取られた面があるが、裏面には自然面が残ることから石材である緑色千枚岩の片理構造を利用して板状の原石から割り取られた粗削り片を素材としていることが分かる。厚さの調整はこの素材片作出時のときのみで、次に両側縁を打剥して側方の形状を調整している。この側方調整は側縁に鋭い稜が形成されるのが特徴である。打剥調整の後、下端のみを研磨によって付刃することで渡具知東原遺跡の大形石斧と異なり刃部磨製石斧となっている。この側方調整の特徴は 20 ~ 10 cm 大の刃部磨製石斧も同様である。中形・小形の刃部磨製石斧も大形の局部磨製石斧と同様に、板状礫もしくは板状に割り取った粗削り片を素材としている。両側縁の打剥調整も同様で、鋭い稜が形成される場合が多い。側面に敲打痕を残す資料もみられるが、部分的なものが多いことから敲打調整痕というよりは着柄による使用痕と考えられる。刃部には刃縁に対して鉛直方向に線条痕が残されており、横斧としての機能が想定される。

石斧様刃器は「刃部のみ磨いて付刃する製作技法は刃部磨製石斧に類似するが、扁平小型のため斧のように付柄しての使用に耐えることが出来ず、手に握ってナイフのように使われていたことが考えられる」ために石斧とは別に分類したとされている。これを改めて観察すると、表面は自然面もしくは片理構造を利用した剥離面で、これは石斧と同様の素材である。また刃部のみ研磨して両刃を付刃するのも石斧と同様である。しかし側面に鋭い稜が形成される資料は少なく、むしろ打撃や折り取りによって面を形成する資料が多い。そのため横断面がレンズ形になる刃部磨製石斧に対して、石斧様刃器は長方形となるのが大きな違いと言える。

一方で野国貝塚では無加工の原石も出土している。原石には 30 cm 大の緑色千枚岩の板状礫が多くみられ、形状からおそらく刃部磨製石斧や石斧様刃器の素材であると考えられる。この石材は沖縄本島北部の名護層もしくは慶良間諸島慶良間層に求められる。従って遠隔地石材の獲得行動が行われ、しかもほぼ原石の状態のまま、舟を用いて生業空間に運搬されていた可能性が考慮される。

2-3 うるま市蔽地洞穴

蔽地島の洞穴遺跡である。表採された資料はヤブチ式土器が主体で、僅かに東原式もみられる。ほかに石斧、敲石、貝製繖がみられる。

2-4 那覇市宾闕原 C 遺跡（東門 2000）

低湿地遺跡で、石器には大形の打製石斧・刃部磨製石斧が大量に出土している。出土木材には島外の木材であるとされる。報告書が未刊のため、詳細は不明の状態である。

2-5 宜野湾市新城下原第 II 遺跡

海岸砂丘上に立地する。野国第 4 土器とされる無文土器が X I 層に、間層を挟んでヤブチ式土器が IX 層から層位的に出土している。動物遺体はリュウキュウイノシシが圧倒的主体を占め、次いでウミガメ類・トリ類。リュウキュウイノシシ骨にはカットマークがみられる（久貝 2007）。放射性炭素年代測定もなされており、IX 層は 6080 ± 50 B.P. という測定値が得られている。石器には刃部磨製の石斧、敲石・磨石類、砥石が 12 点出土している。一方で貝製繖、貝刃、貝錘、ヤス状骨製品など石器を補完するような器種の貝骨製品が出土している点が注目される。

刃部磨製の石斧はいずれも打剥によって側縁に鋭い稜が形成され、刃部のみを研磨して付刃している。

2-6 南城市武芸洞遺跡

河岸段丘状に立地する。ヤブチ式・東原式が出土している。動物遺体にはリュウキュウイノシシが圧倒的多数を占める。石器には刃部磨製の石斧、敲石磨石類、砥石、石皿、スクレイバーなどで計10点ほど出土している。また新城下原第II遺跡と同様に貝繖が出土している。

刃部磨製石斧は表採を含めて4点が得られている。いずれも板状の礫を素材とし、両側縁が直接打撃によって鋭い稜が形成されている。刃縁には刃部に対して垂直に線条痕が残されているため、横斧として使われたとみられる。

2-7 爪形文土器段階の石器組成

これまで確認してきた石器から、加工整形を伴うものは打製石斧と刃部磨製石斧及び石斧用刃器に限られ、明確に爪形文土器に伴う打製の剥片石器はみられない。これに乳棒形で先端部を多用する敲石磨石類や砥石といった礫石器が伴っている。これらの石器の組み合わせはどの遺跡でも概ね共通しており、これが該期の石器組成であったとみられる。この組成は後述のように前後の時期とは異なることから、筆者は「前琉球縄文式石器群」(表1)という名称を付すことを提案している(大堀2014)。ただし石器の出土点数や組成比には遺跡間で差異があり、遺跡の性格に違いがあったことを窺わせる。また貝繖が新城下原第II遺跡や武芸洞遺跡で出土しており、打製の剥片石器が担った機能については石以外の素材による道具が少なからず利用されていた可能性が高い。

上記のように、石材加工を作う石器は石斧とそれに類似した石斧様刃器に限られるが、石斧について新田重清は、野国貝塚にみられる局部磨製石斧を野国タイプ石斧、渡具知東原遺跡にみられる大型の打製石斧

時代区分	石器技術の段階	打製石器		磨製石器		礫石器	石器群の性格
		複合型	単一型	複合型	単一型		
後期旧石器時代	第I段階	△	△			▲▲	低緯度旧石器
貝塚時代	前1期	第II段階			◎	△	▲○
	前2期	第III段階?	▲	○○	○	○	○○
	前3期	第III段階	▲	△▲	△△	△△	○○
	前4期	第IV段階	△△	△△	○○	△△	○○
	前5期	第IV段階	△△	○△	○○	△△	○○
	後1期	第V段階	△△	○△	○○	△△	○○
	後2期	第VI段階	▲	▲▲	△△	○○	○○
	グスク時代	▲	△△	○○	○○	◎○	グスク式

◎ 平均して遺跡より二桁以上出土 ○ 平均して遺跡より一桁から二桁程度出土
 △ 平均して遺跡より一桁出土 ▲ 時期全体で数点のみ出土

表1 奄美群島・沖縄本島諸島における石器群の変遷試案

を東原タイプ型石斧という仮称を与えており、共に次期の曾畠式及び条痕文土器段階にはみられないことを指摘している（新田 2000）。これは該期の石材運用の特徴を考える上で極めて重要な見識であるので、この野国タイプと東原タイプについて検討してみたい。

3. 石斧の製作工程

爪形文土器段階の石斧は、これまでみてきたように 30 cm 近くに達する大形の打製石斧及び刃部磨製石斧と、10 から 20 cm 大の局部磨製石斧及び石斧様刃器が挙げられる。これらのうちで完形の磨製石斧の計測値を確認してみると、器種ごとでほとんど同じ大きさになっていることが分かる（表 2）。のことから、石斧のデザインが極めて規格的で、統一された形状となるように製作されていたことが理解される。

次にこれら石斧の製作方法について、多くの資料が出土する野国貝塚 B 地点を例に考察してみたい（図 3）。第一段階として石斧の素材となる石片の作成が挙げられる。この石斧素材には板状の自然縫のほか、石材である緑色千枚岩・片岩に特徴的な石質である層理構造を利用して打割した粗削片を用いた資料が認められる（写真 1）。この粗削片には表裏の片側面のみに打割面がみられるものと、表裏両面に打割面がみられるものとが認められる。その次段階の未成品と考えられるのが図 3-1 の資料である。この資料は両側面と表面側下端部に直接打撃による剥離調整がみられ、非常に鋭利な稜が形成されている。しかしそれ以外の表裏面及び基部には自然面を残している。研磨による付刃の前段階の資料と想定される。同様の資料は図 3-2 にも認めることができ、この資料も両側面と下端部が直接打撃によって剥離調整され、側縁・下端に鋭い稜が形成されているが、やはり付刃はされていない。この工程の後、図 3-3 ~ 7 にみられるように、大形の石斧は側面に敲打調整がなされている資料が多いことが認められる。特に図 3-4 は付刃がなされず、側面の剥離面が敲打によって潰れた状態の未成品である。この資料によって、敲打調整が剥離調整と付刃の間に行われる工程であることが窺える。また中形の石斧には敲打痕が認められないことから、大形石斧にのみ行われる作業であると考えられる。統いて研磨調整であるが、図 3-3 と 6 の大形石斧、8 ~ 14 の中形石斧には身部の研磨調整が認められる。研磨調整は層理構造を利用した打削面に対し、比較的弱い研磨がなされており、刃部のような明確な磨面を形成されるには至っていない。大形石斧である図 3-6 のみは両側面に研磨によって定角をなし、あたかも定角式磨製石斧のような形状を呈するが、全ての石斧資料に研磨がされるわけではなく、かつこの資料以外に側面の研磨調整は認められないことから、おそらく石斧の厚さ調整のために必要に応じて行われる作業と推定される。同様の身部の研磨調整は武芸洞出土資料にもみることができる。さらに次段階の未成品がみられるのが図 3-4 である。この資料は背面の大部分には自然面が残るが、上記の 2 点と異なり表面は剥離面となっており、石材を打削して板状にしたものと石斧素材としていることが分かる。両側面と裏面下端部には直接打撃による剥離面があり、さらに表面側下端のみ付刃のためとみられる磨面が認められることから、付刃段階の未成品であると想定される。以上の未成品資料の検討からは、第 1 工程：素材片の作出、第 2 工程：側面の剥離調整、第 3 工程：下端部の剥離調整、第 4 工程：デザイン等の必要に応じた場合の敲打調整・研磨調整、第 5 工程：下端部研磨による付刃、という工程を経て製作されたと理解される。一方で石斧様刃器も製作工程は石斧と同様であるが、図の 3 点の未成品には、いずれも側面に表裏いずれかの面を打面とした打削によって幅を調整した痕跡が認められる（図 4）。この側面部の打削

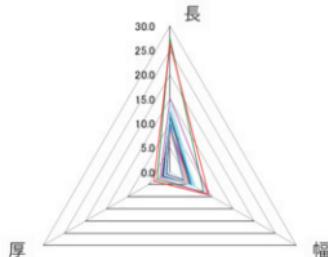


表2 石斧の計測値

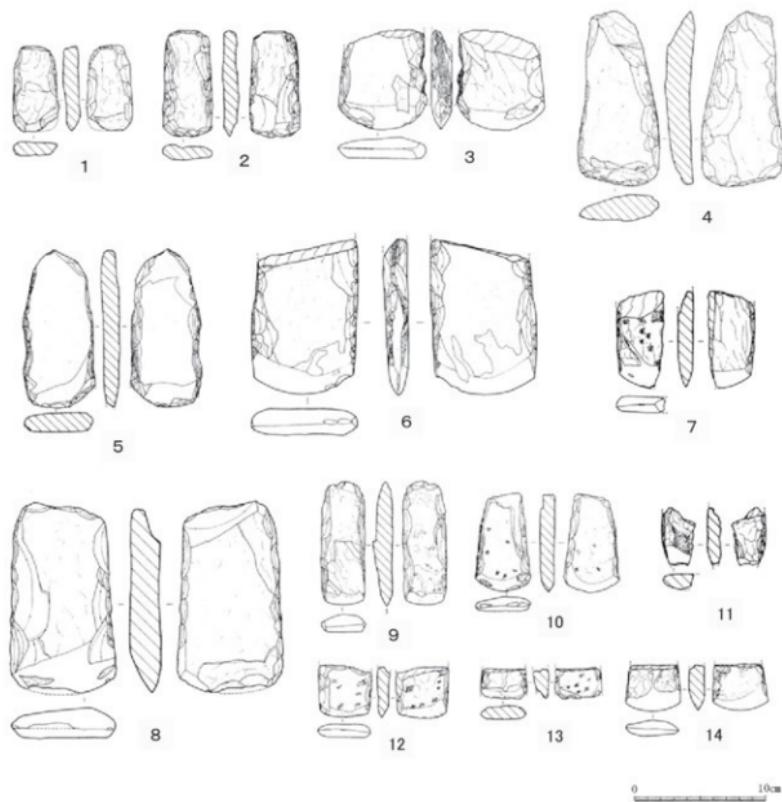


図3 野国貝塚B地点出土の主要な刃部磨製石斧



写真1 局部磨製石斧の表裏面（野国貝塚）

左：粗割面を有する石斧

中・右：自然面を有する石斧



写真2 石斧の側面調整（渡具知東原遺跡出土）

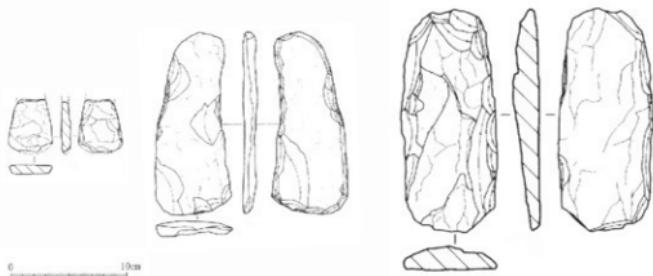


図4 石斧様刃器未成品

は成品にも側面調整がなされていない資料において認められることから、この調整が石斧様刃器の大きな特徴となっていると理解される。

このように野国貝塚B地点出土の石斧を製作工程という観点から検討すると、大形・中形石斧、石斧様刃器は製作工程上でほとんど変わらないことが理解される。ここで渡具知東原遺跡に出土している東原タイプ式石斧との差異が注目されるが、周縁の打剥調整や身部には弱い研磨が1点のみ認められるなど、野国タイプ式石斧とされる刃部磨製石斧とは付刃以外にデザイン、製作技術上で何ら相違点が見出されない(図1)。従って、東原タイプ式石斧は野国タイプ式石斧の附刃前の未成品と考える。

以上のように、該期の刃部磨製石斧には石材の層理構造を利用した素材作出と、鋭利な稜を形成する側面調整の2点に大きな特徴が認められる。この2点の特徴をもつ該期の石斧を、新田の提唱した名称を踏まえて「野国型石斧」と仮称する。

4. 条痕文系土器段階の石器(図5)

爪形文土器段階の前琉球縄文式石器群及び野国式石斧が、後続する曾畠式土器時期に継承するのかを検討するため、この時期に出土する石器について検討したい。ただし該期の石器は爪形文土器段階以上に出土点数が少なく、現時点では渡具知東原遺跡、野国貝塚B地点、伊礼原遺跡の3遺跡に限られるという状況である。

4-1 渡具知東原遺跡

Ⅲ層で条痕文系土器が主体的に出土している。Ⅲ層中では磨製石斧、礫石器系列の敲石磨石類に加えて、報告書中にはチャート製の石槍・ドリル、スクレイパー、石核が新たに出現している。石槍は資料を実見する限り5cmに満たない小形のもので、背面に側縁から求心方向に剥離が施されている。腹面は無加工で素材剥離時のままである。このような特徴から、石槍とするよりはドリルと目されるべき資料である。そのドリルは押圧剥離によって尖らせた先端部に使用時に生じたとみられる微細な衝撃剥離が認められる。スクレイパーとされる資料は明確な刃部のプランティングが認められないことから、所謂UFといわれる資料である。さらにこの遺跡では13個のチャート製石核も出土しており、チャートによる石器製作がこの時期より行われていたことを窺うことができる。

またこの遺跡では3点の打製石斧と4点の局部磨製石斧、12点の磨製石斧と報告書中で半磨製石斧とされる石斧が出土している。打製石斧は爪形文土器段階とは異なり、10cm前後の大きさになっている。刃部磨製石斧は板状礫の両側面を打剥調整した後、端部を研磨して付刃されるが、野国型石斧と異なり側面部は



図5 曾畠式及び条痕文土器段階の石器 (S=剥片石器 : 33%、石斧 : 20%、石皿 : 10%)

平坦もしくは凸形で鋭い稜は形成されていない。いずれも調整されずに残されている自然面から板状礫が素材であることが分かる。最も多い磨製石斧は撥状や短冊状のもので、刃部を中心に全面を研磨して製作されている。身部の研磨がされるものの、部分的に自然面を残す資料が大半で、この自然面から楕円礫が素材となっていることが分かる。半磨製石斧とされるものは表裏のうちの片側面のみを研磨調整された資料である。

が、意図としては磨製石斧と同様のものとみられる。

4-2 野国貝塚B地点

野国貝塚B地点では渡具知東原遺跡ほど良好な堆積状況ではないものの、Ⅲ層において条痕文系土器が主体的に出土している。この層からはスクレイパー、乳棒形磨製石斧、敲石磨石類が出土している。チャート製スクレイパーは報告書中では「下端部に一方向へのチッピングを施し、刃部をつくりだしている」とされるが、実見の限りでは渡具知東原遺跡と同様に使用によって生じた微細剥離であり、これもUFとみられる。

また磨製石斧は報告書中でⅢ群とされる資料が同じくⅢ層において出土している。このⅢ群の磨製石斧は楕円礫を素材とし、野国型石斧にはあまりみられなかった敲打調整が認められる。

4-3 伊礼原遺跡低湿地区

この遺跡では上記の石器に加えて、チャート製打製石鎌や石匙が出土している。これらの資料は押圧剥離を作うものでは沖縄県内における最も古い資料となるが、この押圧剥離を含む複数の工程と加工技術を投下して製作されている点において上記2遺跡と異なる様相となっている。

以上のように、打製石器について渡具知東原遺跡、野国貝塚B地点とともに直接打撃によって作出されたフレイクをそのまま利用する不定形石器が主体であるが、伊礼原遺跡では明確な打製石鎌、石匙といった押圧剥離を作う資料が出土している。特に打製石鎌は県内でも節理面の少ない良質なチャートを素材とし、周縁を規則的な押圧剥離によって調整されるなど、奄美・沖縄の全時期を通じてもかなり精巧な製品である（大堀 2012）。なお石匙は全時代を通じて唯一の出土事例である。ただし今のところ伊礼原遺跡低湿地区以外にみることができない資料であるため、該期の石器技術に押圧剥離が加わったとはみなし難い。現時点では曾畠式土器などと共に搬入されたなどの例外的な要因による資料と考えたい。

また石斧においても野国型石斧にみられた周縁の稜調整がなくなり、身部も研磨された明確な磨製石斧が出現している。デザインにも撥形が加わっているなど、以降の石斧とほぼ変化のない石斧製作と言える。このような石器群は奄美においても概ね共通することからも、爪形文土器段階の石器群から大きく変化した石器群であることを理解することができる。

5. 石材獲得とその消費の様相

原石が取り上げられている野国貝塚B地点では、30 cm以上の緑色千枚岩・片岩の原石が多量に得られている。原石は板状の楕円礫や垂角礫が中心である。これら無加工原石の遺跡からの出土によって、局部磨製石斧は石材原産地付近ではなく、集落に原石を持ち込んで製作されていたことが理解される（写真3）。獲得される石材にこのような大形の原石が含まれる背景には、渡具知東原遺跡や野国貝塚



写真3 緑色千枚岩の原石（野国貝塚B地点）

でみられるような大形の野国型石斧の需要にも対応するためと考えられる。緑色千枚岩・片岩が主体的に選択される要因は、主に打剥調整によって石斧が製作されることに対応した剥離に適した石質であることが要因であるとみられる。しかしそれに留まらず、中形の野国型石斧では層理構造を利用した板状素材が用いられていることが先述の検討によって想定されたが、沖縄本島諸島において緑色千枚岩・片岩は、その石質から層理を利用した剥離による素材作出に最も適した石材であることが遠隔地からの大量搬入の要因と考えられる。搬入された緑色千枚岩・片岩は大形刃部磨製石斧・中形刃部磨製石斧・石斧様刃器のいずれかに加工される。大形石斧の場合は一つの原石から1点の石斧が製作されることが予想される。それに対し、中形石斧・石斧様刃器は石器間の接合作業が行われていないため確証は得られていないが、1つの原石から層理構造を生かして板状の粗削片を複数作出し、さらにその板状粗削片の側面を割り取ることによって多くの石斧素材が作出されていたと想定される。武芸洞遺跡では打剥調整によって生じた剥片が出土しているが、これらが2次利用された形跡はみられないため、石斧製作を目的とした消費的な石材利用であると考えられる。

石斧石材にはほとんどの石器で緑色千枚岩・片岩が選択されている（表3）。これらの石材は沖縄本島とその周辺の離島では獲得できる場所が限られており、現在のところ本島北部の西海岸沿いに分布する名護層か、もしくは本島西側の離島である慶良間諸島に分布する慶良間諸島慶良間層のいずれかに求められる（木崎編 1985）。慶良間層の分布域である渡嘉敷島には爪形文系上器が検出されている船越原遺跡があることから、野国貝塚の報告書中では、石斧石材の獲得地に慶良間諸島が想定されている（沖縄県教育庁文化課 1984）。実際のところ野国型石斧が多量に出土する野国貝塚及び箕闕原C遺跡はいずれも本島中部もしくは南部の西海岸沿いに位置することからも、その可能性は大きいと言える。今後、船越原遺跡をはじめ、慶良間諸島において石材原産地遺跡の性格を窺わせるような状況の発見が期待される。また敲石類石材には砂岩や安山岩・ヒン岩などが挙げられるが（表4）、これらの石材のうち砂岩は本島北部の名護層及び嘉陽層と慶良間諸島慶良間層、安山岩・ヒン岩は名護層中に含まれ、特に名護市嘉津宇岳などが産地として知られる。いずれにせよ遠隔地からの大形原石を含む石材獲得・搬入には舟が用いられたことが想定され、それによって沖縄本島及び周辺離島に及ぶ広域な石材獲得行動域があったと考えられる。

一方で曾畠式・条痕文土器段階において特徴となるのはチャートの使用である。チャートは沖縄本島諸島では本部半島と那嶼層や、伊江島伊江層、伊是名島伊是名層や伊平屋島前岳層に求められる。ただし伊江層のチャートは赤色、前岳層は緑色を特徴とするが、該期にこれらのチャート製石器はみられないため、沖縄本島諸島内では本部半島が石材獲得地候補と目される。一方で石斧や敲石類の石材は該期になども大きな

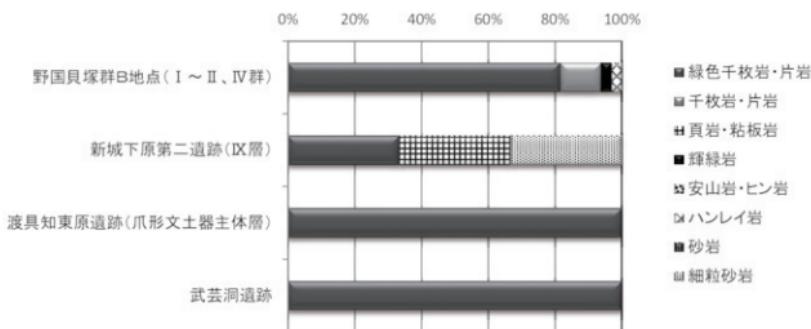


表3 爪形文土器段階の石斧石材

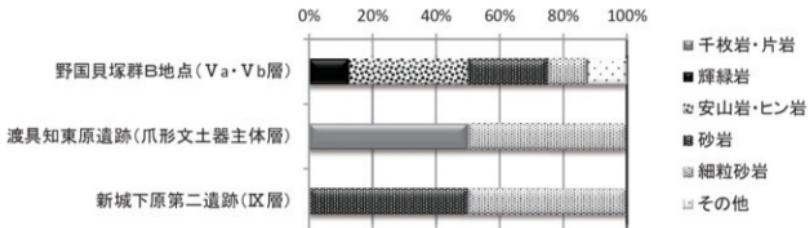


表4 爪形文土器段階の敲石類石材

変化はみられない。従って該期は依然として沖縄本島及び周辺離島に及ぶ石材獲得領域を形成していたことになるが、利用が本格化したチャート獲得のため、石材獲得地に本部半島が加わったことが理解される。またこの時期になると、野国型石斧の途絶とそれに変わる楕円礫を素材とする全面研磨の磨製石斧の製作と剥片石器の導入という2つの変化をみることができる。特に磨製石斧は概ね撥形の製品で、このタイプの磨製石斧も概ね九州以北の磨製石斧と同様のものである（大工原2008）。この状況からは、該期に起きた新たな石器製作は曾畠式土器に伴って縄文型の石器製作技術が流入したものによると考えられる。この縄文時代前期から晩期の石器群を琉球縄文式石器群と仮称しているが、中でも該期はその萌芽期として評価される（表1）。換言すれば、爪形文系土器に伴う前琉球縄文式石器群は縄文文化の影響が全く認められない石器群であると理解できる。不定形剥片石器を伴わず、野国式石斧、乳棒形敲石類、多量の砥石が組み合わさる前琉球縄文式石器群は、該期の沖縄本島諸島で独自の石器群であると考えたい。

他方、石材獲得戦略を加味すると、琉球縄文式石器群の萌芽期における石材獲得行動は、石器石材にチャートが新たに加わることに加え、石斧デザインの変更によってその石材も海岸や河川転石とみられる楕円礫を素材に選択するようになったと考えられる。これによって石材消費は概ね1母岩から一つの製品を製作すると想定される。それに対し、前琉球縄文式石器群の石材獲得は獲得する石材には板状角礫が含まれるため、石材産地は必ずしも海岸に限らない。場合によっては河川を上流に遡上して岩壁にアプローチする必要があったかも知れない。さらに大形であることを加味すると、石材獲得にはかなりの労働コストを投下する必要のあった石材獲得戦略であるといえる。しかし消費戦略の面からは、本稿で検討を行った野国型石斧の製作技術にみられるように1つの母岩から複数の製品を作出することができるため、緑色千枚岩・片岩の石質を生かした低コストの石斧生産を可能としている。このように石材獲得消費戦略からみて、前琉球縄文式石器群と琉球縄文式石器群の萌芽期には、石材獲得・消費戦略上でも大きな相違点が認められる。

また爪形文系の時期は該地の中で最もイノシシ骨が多量に出土する時期であり、石器組成中に狩猟具が存在せども何らかの狩猟具を想定する必要がある。このとき蔽地洞穴や新城下原第二遺跡、武芸洞で出土している貝鏃をはじめ、この時期には多くの貝骨製品が出土している。これら貝骨製品に想定されるのは、貝鏃のほかに貝刃、貝錘、骨推、骨製のヤス状製品といった鋭利な刺突具や刃器などである。これと同様の機能をもった石器が出土しないことから、前琉球縄文式石器群は、このような剥片石器の機能を担う道具は貝や骨を素材とした製品を用いていたと想定される。ただし不定形剥片石器を製作する技術をもたないとは考え難いため、剥片石器がみられない要因には、爪型文土器段階の集団は上記の貝・骨等で需要を満たし得ることで、沖縄本島地域においてチャート産地を開拓していなかった可能性が挙げられる。

6. 小結

爪形文土器段階の石器群を検討した結果、特徴的な石器組成に加え、野国型石斧とそれを製作するための特異な石材獲得消費戦略から、後続とは異なる前琉球縄文式石器群と仮称し得る可能性について論じた。また後続する曾畠式・条痕文土器段階の石器群には縄文石器の導入がみられることから琉球縄文式石器群の萌芽期と評価したが、この石器群は前琉球縄文式石器群とは共通性がほとんどみられない。従って両石器群間には継承性がみられないと結論付けられる。

今日の爪形文土器段階の研究における大きな課題の一つに、爪形文土器から条痕文土器の時期に文化的な系統関係を探ることができるかという課題が挙げられている。伊藤慎二は土器型式学上では爪形文土器から条痕文系土器への変化を追うことができるとしている（伊藤 2011）。しかし本稿における分析からは、むしろ両時期はそれぞれ異なった文化的背景をもった系統性のない文化ではないかと考えられるのである。また近年は『沖縄県史』においても、爪形文土器段階は貝塚時代早期もしくは新石器時代前Ⅰ期という名称から縄文時代早期という名称が使われるようになってきている（沖縄県公文書館（編）2003）。爪形文土器段階の石斧についても九州以北の縄文文化に伴う石斧と相違しないという指摘もあるが（水ノ江 2005）、本稿の分析結果からはこの石器群に縄文文化の影響を認めることはできず、少なくともこの時代について「縄文文化」という言葉の使用は慎重であるべきと思われる。

本稿は 2011 年に國學院大學大学院文学研究科に提出した博士学位申請論文『石材分析に基づく沖縄先史研究』の「第 2 章 沖縄本島地域における初期石材運用」を加筆修正したものである。

（おおほり こうへい：調査班 専門員）

参考文献

- 伊藤慎二 2011 「先史琉球社会の段階的展開とその要因」『先史・原史時代の琉球列島』 p 43-60 六一書房
大堀皓平 2012 「沖縄諸島出土打製石器の基礎的研究」『南島考古』第 31 号 p 31-40 沖縄考古学会
沖縄県教育庁文化課 1984 『野国：野国貝塚群 B 地点発掘調査報告』沖縄県教育委員会
木崎甲子郎編 1985 『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社
大工原豊 2008 『縄文石器研究序説』六一書房
東門研治 2000 「伊礼原 C 遺跡」『考古学ジャーナル』 p 26-31 ニューサイエンス社
新田重清 2000 「沖縄縄文時代主要遺跡から出土する石器の様相について」『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛古希記念論集（上巻）p1-30 高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
水ノ江和同 2005 「南島の縄文石斧」『南島考古』第 24 号 沖縄考古学会

鳥餌入れとその用例について —平成 18～20 年度首里城跡出土品から—

Ceramic Bird Feeders and Their Usage

- Artifacts from the Shuri-jo Castle Site in 2006-2008 Fiscal Year -

仲座 久宣

NAKAZA.Hisayoshi

ABSTRACT : Two ceramic bird feeders introduced from China were recovered from the Shuri-jo Castle site. In this paper I focus on these materials, and also study Okinawan earthenware bird feeders recovered from other sites in Naha city as a comparison. In addition, I also refer to some records of pet rearing in Okinawa. Finally, I explore the usage of these artifacts, referring to modern examples of Chinese bird feeders and a case of the usage observed in Vietnam.

1. はじめに

平成 18 年度から 20 年度にかけて実施した首里城跡発掘調査において、愛玩鳥の飼育に用いる餌入れ、あるいは水入れと思われる中国産磁器が 2 例出土している（本稿では餌入れと称する）。沖縄県内におけるこの種の遺物は、沖縄産及び閩西系陶器の例は散見できるものの、輸入陶磁としては、管見では現段階において類例がないものと思われる。本稿ではこの首里城跡出土資料とともに、近世以降に製作された陶器製餌入れの出土事例も紹介し、さらに参考資料を用いてその使用法を推測してみたい。なお、出土磁器製餌入れの所見は大橋康二氏、森達也氏に賜り、出土動物骨に関する助言を上原靜氏にいただいた。記して感謝申し上げたい。

2. 出土資料紹介

首里城跡から出土した資料は、1 点目が平成 18 年度及び 20 年度の銭蔵地区発掘調査で得られたもので、のちに両者が接合できた色絵磁器である。もう 1 点は、平成 19 年度の御内原北地区発掘調査で得られた青磁製の餌入れである。なお、これらをトリの餌入れとしたのは、その小振りなサイズと、鳥籠内部に固定する目的で胸部に付けられた環耳の存在による。ここでは比較資料として、沖縄県内外の遺跡において出土した餌入れも紹介する。

① 色絵磁器製餌入れ

図版 1 左手の資料は、平成 18 年度及び 20 年度にまたがって出土した色絵磁器である（仲座 2010）。いずれも首里城北側外郭に位置する銭蔵地区の方形石組遺構床面からの出土で、遺構の年代は、外郭拡張後である 15 世紀末以降を想定している。平成 18 年度に出土したのは、接合資料の左手にあたる部分で、部位的に環耳がみられないことから、当初は型造りの小鉢を想定していた。しかし、平成 20 年度に環耳が付く図の右手破片が出土し、前出資料と接合されたため、2 点は同一個体の餌入れであることが判明した。

資料は景德鎮産の色絵磁器で、その上面觀はモモの実を縱割りにしたハート形を呈する。この胸部側面には、果梗（ヘタ）と思われる突起がコブ状に貼付され、その対極には、実の先端にあたる部分が尖らせて表現される。側面觀は内湾する浅鉢形を呈し、口径は 5～6 cm、底径 2.8～3.5 cm、器高 3.3 cm を測る。底部は施釉後に接地面のみヘラで削り、不定型なベタ底を成す。本体の成形は、型により左右を個別につくり貼

り合わせている。この接合部の境界はナデ消されるが、実の先端脇から果梗の脇にかけ、内面の一部で釉下に浅く凹み、また無釉の底面でわずかに隆起する。

環耳は1点が胴の中央部で縦位に貼付されており、紐状の外側部分が破損している。この環耳の孔は粘土を縦位に貼付後、左側からあけたとみられ、孔の右内側には、穿孔の際に生じたバリが釉を透過して確認できる。なお、この環耳の点数については、第2図11・12に示した群馬県五目牛南組遺跡出土の青花太鼓型倒入れの例で、2点が近接して貼付されるのが確認できる（大橋1992）。本資料に残る環耳の痕跡は1点であるが、本体部がその右脇から破損しているため、2点目となる環耳が存在したかの判読はできない。

釉は澄んだ青白色で厚く、貫入はみられない。かなり剥落・退色しているが、部分的に上絵付けによる朱色の顔料が斑状に残る。これは本資料の形状がモモであるだけに、当初は器面に広く塗られていた可能性がある。さらにこの顔料は、破片の口縁部に残る焼成時の窯傷らしき亀裂中にもみられ、この亀裂を埋めて接着する機能も兼ねていたことが想定できる。また器面の一部には、微小な呉須の飛斑が複数確認でき、本資料を焼成した窯では、青花も同時に焼いていた可能性がある。なお、モモの実は不老不死・長寿・破邪を象徴する吉祥図案とされ、古くから様々なモチーフに用いられている。

②青磁製倒入れ

図版1右手及び第2図1の資料は、平成19年度の御内原北地区において、15世紀中葉に位置付けている基壇状遺構内の側溝中から出土したものである（沖縄県立埋蔵文化財センター2010）。

本資料は破片がまとまって出土したため、完全に近いレベルまで接合ができた。中国龍泉窯産の青磁で、年代は14世紀後半～15世紀前半である。器形は口縁が内湾する平底の鉢形で、成型は籠轆によるものと思われる。口径はやや楕円で4～4.3cm、底径2.9cm、胴の最大径6.2cm、器高3.6cmを測る。口唇断面は丸く内湾し、器厚は最大6mmを測るが、胴の最大径付近の器厚は1.5mmで、釉を除いた生地のみの厚さだと、1mm程度と極度に薄い。底部はかすかに上げ底を呈すベタ底で、釉剥ぎを行ったと思われるが、剥ぎ取りが甘いため弱い光沢を発する。



第1図 餌入れ出土地点（横内家資料平面図をトレース・加筆）



1 餌入れ磁器（左：銭蔵地区出土色絵、右：御内原北地区出土青磁）



2 環耳部分拡大（左：銭蔵地区出土色絵、右：御内原北地区出土青磁）

図版1 首里城跡出土餌入れ

環耳部分は紐状に細い外側が破損するが、胴上部に位置する最大径位に 1 点が貼付されている。この環耳と胴部との接点は小さいが、厚く施釉されることにより補強されている。

資料は全面が被熱を受け、そのため表面は溶解・発泡し、砂礫が付着している。釉は淡緑色に濁り、貫入はみられず透明度は低いが、底面以外でほぼ均一に厚く施される。なお、この周辺から出土する青磁碗や鉢についても接合率が高く、これらは火災により焼け落ちた一括資料として捉えている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010、仲座 2011）。

③陶器製陶入れ

陶器製陶入れの出土は、中城御殿跡（沖縄県立博物館 1995、沖縄県立埋蔵文化財センター 2012）、御細工所跡（那覇市教育委員会 1991）、首里旧金城村跡（那覇市教育委員会 2001）、真珠道跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2006）の 4ヶ所において出土している。これらの出土地は、現時点では首里に限られており、このことから愛玩鳥飼育の風習は、首里に暮らす士族を中心とした富裕層にたしなまれていたことが考えられる。統いて各資料の紹介を行う。

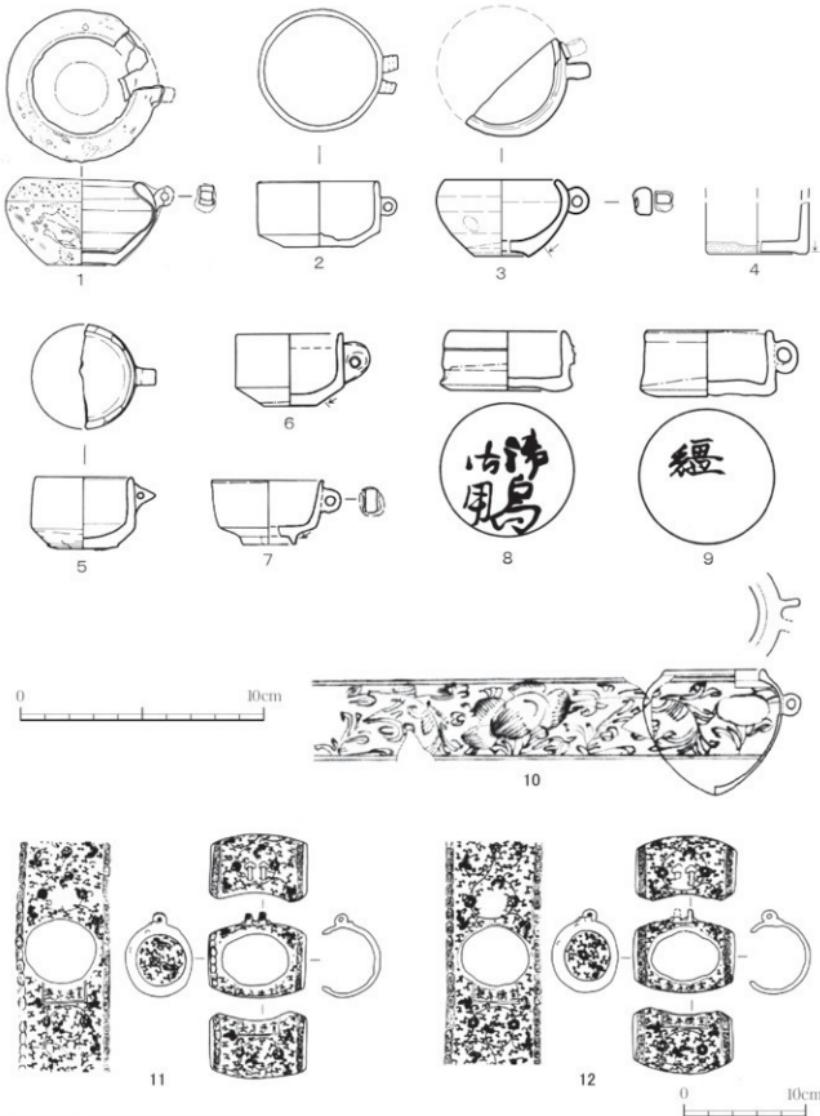
国王世子の邸宅跡であった中城御殿跡からは、沖縄産 2 点（搅乱層、近世の層）と関西系 1 点（搅乱層）の合計 3 点が出土している。この内、搅乱層から出土した沖縄産陶器製の法量は口径 5.1 cm、底径 3.0 cm、高さ 2.8 cm を測る（第 2 図 2）。形状は低い円筒形で、直立する口縁部から直に胴へ至り、腰部が「く」の字状に屈曲する。底部はベタ底で、成形は輪轆引きにより行われ、見込みには渦巻き状の輪轆痕が残る。腰部以下は無釉で、外面は茶褐色の灰釉、口唇から内面にかけては、白化粧後に透明釉をかける。環耳は胴の中央付近に、わずかに間隔をあけて 2 点が貼付されている。本資料は形状や環耳の点数等から、江戸遺跡などで出土している瀬戸・美濃系陶入れ（第 2 図 8・9）に類似しており、その影響を受けた可能性がある。

次に近世の層から出土した沖縄産の資料は、内湾する小鉢形で口径 4.7 cm、器高 2.7 cm、底径 2 cm を測る。胴上部に環耳が 2 点並列して貼付され、胎土は白色で胴下部まで透明釉を掛ける（第 2 図 3）。統いて搅乱層から出土した関西系陶器の資料は、18 世紀後半～19 世紀製作とされる筒形陶入れの底部である。底面はやや上げ底で底径は 4.2 cm を測る。胎土は淡灰白色で細かく内外面及び底部内に淡褐色釉を掛ける（第 2 図 4）。本資料は胴上部が欠失しているため環耳はみられないが、形状から倒入れになるものと思われる。

御細工所跡の調査では、口径 4.0 cm、底径 2.8 cm、器高 2.9 cm の沖縄産陶入れが得られている（第 2 図 5）。内面及び腰部まで灰白色の釉が施され、底部はベタ底で糸切り痕を残す。口縁部直下には、側面觀が三角形の耳を付け、横位に小孔を穿つ。資料は搅乱層からの出土であることから、御細工所跡や周辺の遺構との関係を知ることはできないが、1700 年頃の製作とされる首里古地図（嘉手納 1970）によると、御細工所跡の西側には、「東風平按司」等の士族屋敷と思われる区画がみえ、これらに関わる可能性がある。

首里旧金城村跡の資料は、口径 4.4 cm、底径 2.2 cm、器高 3.0 cm の沖縄産で、底部近くまで透明釉を施す（第 2 図 6）。表土直下からの出土であることから、遺構との関連は不明である。しかし、ここも首里城に近く、首里古地図によると士族の屋敷が集中するエリアにあたることから、これらの屋敷との関わりがありそうである。

真珠道跡からは、口径 4.7 cm、底径 2.2 cm、器高 2.7 cm の沖縄産陶入れが得られている（第 2 図 7）。器形は円筒状で、口唇はやや外傾し舌状に尖る。底部は断面が三角形の高台を有し、その脇まで透明釉が施される。環耳は 1 点で、胴上部に貼付される。資料は遺物を多く含む II 層からの出土であるが、「本層は往時の堆積と考えがたい」と報告されているため（沖縄県立埋蔵文化財センター 2006）、遺構との関連は不明である。



第2図 各地から出土した餽入れ

1: 首里城跡、2~4: 中城御殿跡、5: 御細工所跡、6: 首里旧金城村跡、7: 真珠道跡、8~10: 東京大学構内の遺跡、
11・12: 五目牛南組遺跡

3. 現代の倒入れ（中国製・ベトナムにて購入）

首里城跡において、上記した2例の中国産倒入れが出土して以降、輸入陶磁器の類例について国内外の博物館図録や陶磁器関係の書籍等で比較資料の収集を行った。その結果、中国産は元代から清代にかけて数例が確認でき（朱伯謙 1998 ほか）、ベトナム産では1例が、過去に町田市立博物館で開催された展覧会の図録中に、「青花倒入れ（東南アジア陶磁館所蔵 15～16世紀）」として掲載されていたため（町田市立博物館 2001）、ベトナム産の倒入れが存在することはすでに確認されていた。

筆者は2001年3月に、ベトナム北部のハノイ周辺を巡り、窯跡や博物館等において、主に沖縄県内で出土するベトナム産陶磁器の比較資料調査を行った。その中で、前記した図録に収められていた倒入れを手がかりに、ベトナム産の例についても情報収集を行った。ここではその際に購入した現代の倒入れ及び使用事例を紹介し、出土品用例の参考としたい。

このベトナムにおける倒入れの比較資料調査の対象として、まずは博物館・美術館の展示品及び、古物商において伝世される例を求めた。しかし、そこで確認できたのは、碗、皿、壺類を中心で、小物だと合子や小壺・水滴類があり、倒入れは見あたらなかった。次に、現在のベトナムで生産している倒入れを求めた。しかし、調査の合間に訪れた数軒の市場において確認できた焼物は、一般的の食卓に並ぶ碗、皿、杯、鍋等の器種に限られ（図版2-1）、ついにベトナム産の倒入れと思われる資料を確認することはできなかった。この理由はとして、トリを飼育する人たちが、ごく一部の市民に限られるという需要の低さから、現在は生産していないことが考えられ、この仮定に立つと、前記した15世紀頃のベトナム産倒入れは自国で消費するものではなく、輸出用に生産されたものと捉えることができる。

このような中で、次に案内されたハノイ市内の小鳥専門店において、ようやく磁器製の倒入れを確認することができた。そこでは数種類の形状、サイズ、文様の倒入れ4～5点が1セットとして、60,000ドン（約350円/2001年3月時のレート）前後で販売されている（図版2-4）。これらの商品には、製造国を示す刻印やシール等の表記がみられないことから、当初は生産地の特定が困難と思われた。しかし、その包装紙として使用されていた新聞紙に、中国語の表記が確認できること及び、製品の文様・製作技法等から、中国産と考えることができそうである。このように、安価な中国産が流通している状況からも、ベトナムではすでに生産されていない可能性が高い。

図版3-2の資料は、色絵磁器製の尖底倒入れである。全体に薄造りで軽量化が図られており、胴の最大径位には、横位に胴接ぎによる境界が見られるため、型打ち成形後に接合したものと思われる。口唇以外に



1 市場で販売される陶磁器類



2 ハノイ近郊の小鳥専門店

図版2 市場での陶磁器販売風景・小鳥専門店（ベトナム ハノイにて）



1 現代の餌入れ（中国産・下段中央は平底でそれ以外は尖底）



2 尖底餌入れ竹製器具装着時



3 器具分離後に現れた環耳



4 平底餌入れ竹製器具装着時



3 器具分離後の状況

図版3 現代の餌入れ（中国製 ベトナムにて購入）

透明釉を施し、胴部には上絵付けにより、朱・黄・緑色の釉薬を用いた鳳凰が型紙によりプリントされる。この胴部には、鳥籠の格子に固定するための側面に縦溝が彫られた立方体の竹製器具（有溝竹製器具）が付き、使用時には籠の内壁格子に宙吊り状態で固定する。

この竹製器具は、上面は器壁側が狭い扁形で、側面・前面は長方形を呈する。器壁に接する面は、曲面に合わせて密着するようラウンドして削られ、その境界には、接着に用いた透明のボンドがみられる。このことから、当初はこのボンドのみで固定されているものと思われた。しかし、器具の側面に打ち込まれている竹釘が確認できたことから、これを抜いて分解したところ、器具の内部は中空で、その内側には倒入れ本体に付着する環耳が1点収まることが判明した（図版3-3）。竹釘は竹製器具と倒入れ本体を固定するため、器具側面から環耳を貫通させて打ち込まれている。この環耳の形状は、断面方形の円筒状で、歪みがなく均整を保つことから型押しによる成形と思われ、竹製器具を固定させる目的がある。

これらの特徴から、本資料の製造は上下及び環耳を個別に成形したのちに胴接ぎを行い、環耳を接合して施釉後、覆焼きにより焼成されたことが判る。なお、本資料は第2図10で示した東京大学構内の遺跡で出土した染付倒入れ（東京大学埋蔵文化財調査室1990b）と形状が類似している点で興味深い。

統いて図版3-4の資料は、染付磁器製倒入れである。内湾する轡筒底の鉢形で、本資料も胴の最大径位に胴接ぎ痕が確認できることから、上下を個別に型打ち成形して接合している。内底は浅くくぼみ、疊付けは無釉である。文様は線描きのラフなコバルトの草花文が、器壁全面及び内底面に印判で施文される。本資料も胴部に立方体の有溝竹製器具が、前記した尖底の資料同様に竹釘とボンドで接着されており、これを分解すると、環耳が1点付着する状況が確認できた（図版4-5）。本資料の器形は、平成19年度出土青磁倒入れと類似しており、定型化された倒入れの一群を成す可能性がある。

以上、2点の参考資料を紹介したが、これらは先に紹介した出土品との共通項が多く、その形状・用例は現代まで伝統的に受け継がれている可能性が指摘できそうである。

4. 用例について

これまで、出土品と参考資料として現代の倒入れ磁器の特徴を挙げてきたが、ここでは出土品の用例について、現在のベトナムで行われているケースを参考に類推してみたい。

ベトナムの小鳥専門店及び、ハノイの南側に位置するバッチャン村における小鳥飼育状況からは、尖底、丸底、平底、楕円丸底の4種の小鳥倒入れが確認できた。これらの倒入れは中国製と思われ、色絵が主体となるが、染付も存在する（図版3）。

倒入れのサイズは、大きく大・中・小に分けられ、直径は3~5cm、高さは尖底で3~6cm、平底で2cm~と小振りであることと、器厚は2mm前後で全体的に薄いため、重量は約10~50gと軽い。その側面には、例外なく竹製器具が環耳を通して竹釘で固定されている。

この使用事例であるが、鳥籠内壁の格子間に、竹製器具の縦溝があたるように挟み込み、宙吊り状態で固定している（図版4-2）。倒育される小鳥に与えられる側は、雑穀のようなものと思われるが、重量が軽いため宙吊りの倒入れに満載しても、過重により落ちたりすることはない。

また、鳥籠の底面には、飲用及び水浴び用として、プラスチック製容器や、食器の鉢類を代用している例がみられた。この例から、薄く軽い製品は宙吊りで使用し、大型かつ重い製品、あるいは水を入れるなどして重くなった容器は、床面に設置する状況が見える。この傾向から、出土倒入れの用例について類推してみたい。

出土資料紹介の項であげた倒入れは、中国産2点及び沖縄産5点、関西系1点で、すべて平底の倒入れである。これらの最大径は、磁器製で約6cm、陶器製は4~5.1cmと現代の倒入れに比して大振りであり、器

壁についても厚手のため、軽量化が考慮されているとは言い難い。また環耳について言えば、出土磁器製のものは細く繊細であることから、宙吊りの使用には耐え難いと思われる。これに対し、出土陶器製の環耳は磁器製より強固な造りを成すが、平底である点と器高が低い点で、宙吊りの場合、水平を保った状態で器を固定するには安定性に欠ける。これらの点から、先に紹介した出土品に関しては、籠の床面に接地しつつ、何らかの方法で格子に固定していたことが考えられる。

しかし、これらの平底の倒入れを、籠の床面に接地した状態で環耳を格子に結束したとしても、移動に際して籠が傾斜、あるいは上下に揺れることが予測できる。この場合、倒入れは環耳部分を軸として、横方向に旋回するか、上下にバウンドすることが推測でき、それが原因となり倒入れや鳥籠が破損し、飼鳥にも危険が及ぶ可能性がある。この状況を改善するためには、倒入れが動くことがないように固定する工夫が必要となってくる。

そこで考えられるのが、現代倒入れに見られる有溝竹製器具の存在である。この器具については、現時点では史料等にみえないことから、その発生等については不明である。しかし、前記した状況を回避するためにには、この器具の装着が最も有効と考えられ、移動が前提となる鳥籠内に確実に固定するためには不可欠な器具と言える。また、加工が容易な竹を用いている点でも、環耳や格子のサイズに合わせて製作しやすいという利点があり、その簡易性から出土品にも装着されていたことを想定することができるが、現状ではその痕跡が確認できず、特定は困難である。

ここで用例についてまとめる、今回紹介した現代の倒入れは、全てが小型・軽量で竹製器具が装着されることから、籠内では宙吊りで使用することが前提となっている。これに対し、出土品の例は全て平底で大振りの資料が多い上に重く、宙吊りによる使用には適していない。従って、平底の出土品は倒水兼用として、籠の床面に設置していたことが考えられそうである。

5. 動物愛玩の記録・痕跡

この沖縄において、愛玩鳥飼育がいつ頃から始められたのか定かでない。しかし、王府時代の記録には、愛玩・觀賞用、ときには贈答用と思われるトリの名がしばしば現れる。例えば、王府時代の外交文書である『歴代宝案』によると、尚徳王は 1470 年に朝鮮へオウムやキュウカンチョウを贈り、その返礼として方冊蔵経を得ている（沖縄県歴代宝案編集委員会編 1997）。これらの鳥類は、沖縄固有の在来種ではないことから、その生息地のひとつである東南アジアから、何らかの形で移入されたものと思われる。なお、この歴代宝案



1 ショーケース内に餌入れが並ぶ



2 餌入れの用例（ハノイにて）

図版4 餌入れの用例（ベトナム ハノイにて）

には 1425 年から数回にわたり、シャム、マラッカ、スマトラ、ジャワ等の東南アジア諸国と交易に関する文書を交わしていたことが見える。これらの文書に記載されている交易品目録には、陶磁器や香木、織物等の名称はみえるものの、贈答に用いた鳥類の名を確認することはできない。しかし、運ばれたトリたちは多くの舶載品のひとつとして、これらの交易地から入手したことが考えられ、その運搬や飼育に際し鳥籠と餌入れは必須である。

次に、近世首里王府の公文書である『評定所文書』には、那覇に逗留する中国やイギリス人が、王府あてにメジロを飼育したいとする要望を記したくだりがあり、その中にメジロの方言名である「さうみな」、「さうめなあ」の名称がみえる。また、そこには烏龍の製作を請け負う「細工人」の存在も確認でき、烏龍は受注生産品であった可能性が考えられる（琉球王国評定所文書編集委員会 1989・1998、久場 2006）。

なお、ここに出てくるメジロについては、東アジア、東南アジアに広く分布するが、沖縄県内においても山地から平野にかけて生息しており、地域亜種のリュウキュウメジロとして、今日でも愛玩用として飼育される馴染み深いトリである。この記事から、飼育される鳥類は移入されたものほか、在来の野鳥も対象にしていたことが想定できる。

これらの記録には、今回主題とした餌入れの記載は見あたらないが、当時の愛玩鳥飼育が王族や士族に限られる習俗であれば鳥籠と同様に、その付属品である餌入れに關しても、雑器的な量産品ではなく、受注生産品としての性格が考えられる。そこから、当時の王族や士族がたしなむ趣味の一端をうかがい知ることができるとともに、そこに贅を尽くすという優雅な一面を感じさせる。

なお、県内で出土品として確認できる愛玩動物と思われる動物骨として、現在でもボビュラーなイヌについては縄文時代早期から（沖縄県教育委員会 1987）、ネコについてはグスク時代から（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 ほか）、これまで多くの事例が報告されている。この内、イヌの骨には解体時のものと思われるカットマークが残る資料がみられ、狩猟用・愛玩用のほか、一部は食用に供された可能性がある（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 ほか）。

その他、勝連城跡三の郭北側城壁より、大型のオウムとされる右中足骨が 1 点出土しているほか（勝連町教育委員会 1990）、特に珍しい事例としては、今帰仁城跡よりトラの下顎骨片が一対得られている。しかし、ここでは下顎以外のトラの骨が一切見あたらないことから、他の部位は当初からなかった可能性があるとされ（今帰仁村教育委員会 1991）、この場合、トラの下顎部あるいは頭部のみが、装飾品・威信財または珍品目的で輸入された可能性がある。

次に、首里城跡管理用道路地区の調査において、サルの骨が 2 個体分出土しており、その時期は伴出する陶磁器類から、16～17 世紀に属する可能性があるとされる（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001）。これらはミトコンドリア DNA 変異を用いた遺伝子レベルでの比較分析により、ヤクシマザルとの同定がされ（毛利ほか 2001）、さらに、焼かれた痕跡やカットマークが見られないことから食用でないことと、歯の萌出時期と咬耗度から、野生ザルより飼育ザルに近いといつ（毛利 2001）。これらのことから、このサルは愛玩を目的に移入された可能性が考えられる。この骨が出土した地点は、南側外郭の外（南）側斜面であり、遺物を含む堆積土は、その北側台地上の内郭に広がる御内原からの投棄、あるいはそこから流出したものと考えられている。このことから、出土したサルは御内原で飼育されていた可能性があり、これらの出土骨や餌入れの存在から、城内では数種の愛玩動物が飼育されていたことが判る。

6. おわりに

以上、首里城跡及びその周辺から出土した餌入れを中心に、資料紹介とその用例、愛玩動物の記録・痕跡について論じてみた。最後に若干の考察を加え、まとめとしたい。

この御入れは出土数が希少であることから、その変遷を読むには困難な面もあるが、本稿であげた県内外の出土品から、大きく次の4種に分けることができる。①平底鉢形（中国産青磁・色絵）、②尖底鉢形（中国産染付）、③太鼓形（中国産染付）、④平底筒形（瀬戸・美濃系を含む関西、沖縄産）である。

この中で①平底鉢形のタイプは、出土品及び参考に用いた現代御入れの例から、15世紀頃～現代まで継続して製作されていることが考えられる。次に②尖底鉢形のタイプは、環耳のないベトナム産染付の例が15世紀頃には存在し（町田市立博物館2001）、その他江戸遺跡から出土した1820年～幕末とされる中国産染付（東京大学埋蔵文化財調査室1990）及び、この類品が現在も製作・販売される事例から、15世紀頃から現代まで平底タイプと並行して存在していた可能性がある。また、その用例についても前記した類推から、平底タイプの床面設置と尖底タイプの宙吊りとが併存していたことが考えられ、その中で移動が前提となる鳥籠内に固定する必要性から、環耳が考案されたことが想定できる。

統いて、群馬県で出土している③太鼓形の例は、現時点で18世紀の例が知られるのみであり（大橋康二1992）、御入れの中では18世紀以降に流通した形状と考えられる。④筒形平底は、江戸遺跡で出土する瀬戸・美濃系陶器と、沖縄産の例がある。前者の瀬戸・美濃系は、18世紀中葉頃に出現して19世紀になると増加する傾向にあるとされ（東京大学埋蔵文化財調査室1990、成瀬晃司1996）、後者もほぼ同時期かこれに後続する時期の製作と考えられる。この沖縄産陶器製の形状は、瀬戸・美濃系の形状と近似しており、製作にあたり影響を受けたことが考えられる。

この中で①～③に該当する輸入陶磁製については、全国的に見ても出土例は希である。その理由として特に①②の資料に関して言えば、中世の段階ではトリの飼育が一部の権力者等に限られたことによると思われ、トリは交易による舶載品の一部として持ち込まれ飼育された可能性がある。この際、御入れは個別に発注するのではなく、トリを持ち込む際の附属品として同時に移入されたことが考えられ、そのため出土量が多くなることが考えられる。

その一方で、日本国内では江戸時代中期に大名・旗本はもとより、庶民の間にもトリの飼育が流行したとされる（細川2006）。これに伴い、陶器製御入れが近世の瀬戸・美濃を中心とする地方の窯業地で焼造され、江戸にもたらされている。そのため、江戸遺跡からは一定量が出土しており、この状況から、ある程度量産が行われていたことが推察できる。これに対し、その影響を受けて製作されたと考えられる沖縄産の例は、出土例は少ないが施釉の状況等から壺屋で焼成されたものと考えられ、出土量から注文により少量が製作されたものと思われる。

なお、かつての琉球が周辺諸国と交易を繰り返し、多くの文物が行き来していたことは、出土品や各種の記録から明らかである。これらの物資とともに、煙草や茶・酒等の嗜好品及び、象棋をはじめとする娯楽の文化が伝わり、その一環としてトリをはじめとする動物を愛でる習俗がもたらされた可能性は十分に考えられる。

しかし、発掘調査において確認されるその痕跡といえば、今回紹介した陶磁器製の御入れや、トリの遺存体であろうか。ちなみに、これまで首里城跡から出土しているトリの骨は、その大半をニワトリが占めており、その他カモ類、キジ類、サギ類、カモメ類、キジバト、カラス、ワシ等が見られ（沖縄県立埋蔵文化財センター2005ほか）、食用と思われるものと野鳥が混在している形である。しかしその多くは、骨の残存状況や標本の不足から種の特定が困難で、それらは分類の段階で「トリ」として留めざるを得ない状況にある。これらの不明鳥類には飼鳥が含まれている可能性もあり、今後は交易により移入されたことも想定し、近隣諸国をも含めた広範に及ぶ比較標本の強化等、種の特定に向けた対策も必要となろう。

（なかざ ひさよし：調査班 主任専門員）

〈参考・引用文献〉

- 大橋康二 1992「Ⅲ 近世・近代 五目牛南組遺跡出土の鳥居人について」『群馬県佐波郡赤堀町五目牛南組遺跡発掘調査報告書歴史時代編』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 沖縄県教育委員会 1987『古我知原貝塚－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書一』
- 沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿跡－旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査一』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書一』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書一』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『真珠道路 首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（1）』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書一』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）』
- 沖縄県歴代宝案編集委員会編 1997『歴代宝案』訳注本第2冊（第1集 卷42・1-41-17、卷40・1-40-01ほか）
（財）沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室
- 勝連町教育委員会 1990『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査一』
- 嘉手納宗徳 1970『首里古地図』沖縄風土記刊行会
- 久場政彦 2006『沖縄の伝統烏龍について』『沖縄県立博物館紀要第32号』沖縄県立博物館
- 朱伯謙 主編 1998『龍泉窑青瓷』藝術家出版社
- 新沖縄県史編集専門部会（考古）編 2003『沖縄県史 各論編第2巻 考古』沖縄県教育委員会
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990a『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点 医学部附属病院中央診療室・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990b『東京大学構内の遺跡 山下会館・御殿下記念館地点』
- 仲座久宜 2010『首里城跡発掘調査（錢藏跡）』『発掘調査速報展 2009 文化講座レジュメ』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 仲座久宜 2011『首里城内における3時期の廃絶を示す貿易陶磁器－平成19年度の調査成果から－』『貿易陶磁研究第31号』日本貿易陶磁研究会
- 今帰仁村教育委員会 1991『今帰仁城跡発掘調査報告書II』
- 那霸市教育委員会 1991『御辯工所跡－城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告書一』
- 那霸市教育委員会 2001『首里金城村跡－個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査一』
- 成瀬晃司 1996『第一部 記載の世界』『歴史の文字 記載・活字・活版』東京大学総合研究博物館
- 細川博昭 2006『大江戸飼い鳥草紙－江戸のベットブーム』吉川弘文館
- 町田市立博物館 2001『ベトナム青花－大越の至上の花』
- 毛利俊雄 2001『首里城跡管理用道路地区出土の獸類遺体について』『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 毛利俊雄・吾妻健・石神盛敏・川本芳 2001『ミトコンドリアDNA変異を用いた種判別：沖縄県首里城出土マカク古骨と現世種の比較』『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 琉球王国評定所文書編集委員会 1989『評定所文書』第3巻 潟添市教育委員会
- 琉球王国評定所文書編集委員会 1998『評定所文書』第14巻 潟添市教育委員会

天界寺跡ほか出土の土器

Potterys Excavated from the Tenkaiji Temple Site and Other Sites.

西銘 章

NISHIME Akira

ABSTRACT : This paper is an additional report on pottery excavated from the Tenkaiji temple site, the Shuri-jo castle site, and the Wakuta kiln site. It also includes amendment and additional information on pottery from the Yacchinogama cave site, the Shinzatomojima-johodaichi site, and the Shinzatohigashimotojima Site. In addition, a report on pottery from the Arahigashi shite is also included as a supplement.

1.はじめに

ここでは既報の天界寺跡ほか出土の土器の追加・訂正、新たに阿良東遺跡の土器を報告する。

まず、天界寺跡、首里城跡、湧田古窯跡から出土した土器^①のうち、宮古式土器、中森式土器、その他の土器を追加報告する。これらの遺跡は複数回にわたって調査が行われているため、地区ごとに報告する。また、ヤッヂのガマ、新里元島上方台地遺跡、新里東元島遺跡の報告の訂正等も行う。

阿良東遺跡において行った試掘調査で出土した土器と、報告を訂正する天界寺跡の錢貨は内容が異なるため付録とした。

2. 天界寺跡ほか出土の土器

① 天界寺跡

天界寺跡は沖縄県教育委員会、那覇市教育委員会の調査がある。ここでは沖縄県教育委員会による西地区（埋文センター 2002b）、東地区（埋文センター 2001a）の土器をあげる。第1図1～15は西地区、第1図16～19は東地区出土の土器である。遺物の詳細は観察表にまとめた（以下同じ）。土器の再集計は行っていないが、西地区からの出土が多いと感じた。なお、西地区的土器の報告において、I類は宮古式、II類は中森式ないしパナリ焼に相当する。

第1図1～10は宮古式で、おむね宮古第一型式（以下、第一型式）で、1点のみ同第二型式（以下、第二型式）と思われる資料がある。器種は壺形と鉢形^②があり、今回とりあげた資料で特徴的なものは口唇部を平坦に形成するものである。

1～9は第一型式である。壺形は1・2で外反の弱いものである。4・5も壺形と思われ、これらは外反が強いもので、特に5は強く折り返す。5は破片が小さいため傾きの設定に難があり、平坦に形成した口唇部は側面でなく上にむく器形の可能性もある。2は舌状に形成した部分を口唇部として図化した。下側として図化した部分は平滑になっており図示で上側とした部分は断面が摩滅したもので、下側が口唇部の可能性もある。あるいは壺形ではなく、上側、下側とも残存しており、それならば側面に窓状の切れ込みをもつ器種（七輪？）も考えられる。とりあえず壺形とする。鉢形は口縁がやや内傾・外反するものがあり、9は口縁がハの字状に開く器形である。1は器面が黒色を呈し、ミガキにより光沢がある。似た土器として9・20などがある。

10は内面に回転台^③によるとと思われる調整をナデ消しているようであり、断面は弱く波状にみえる。第二型式の可能性もあるが保留する。口縁部が強く内傾するため、器種は炉であろうか。

11～13は中森式である。器種は壺ないし鉢形である。

14・15は宮古式、中森式とも異なる土器である。14は混和材に貝殻片を多量に含み、器種はハート形の窓をもつ炉（または風炉？）であろうか。15は全形をうかがうことはできないが、楕円形に近いような浅鉢ないしは皿形であろう。大きさ（深さ）のわりに器厚が約2cmと厚ぼったい。貝殻と思われる細片を多く含むが胎土は宮古式や中森式と異なる。

第2図16・17は中森式で16は壺形、17は壺ないし鉢形であろう。18はバナリ焼の壺形。19は宮古式、中森式とも異なる土器で、混和材は中森式に近い。一部に漆喰？が付着する。

② 首里城跡

書院・鎮間地区（埋文センター2005）、下之御庭・ほか地区（埋文センター2001b）の土器をあげる。第3図20・21が書院・鎮間地区、同図22～24が下之御庭・ほか地区出土の土器である。首里城跡各地区的土器をすべて確認できなかったが、土器（宮古式など）の集中する地区は特になさそうである。

20が宮古式、21がバナリ焼である。20は第一型式の壺形で、なで肩の器形をなす。口縁部資料と胴部資料の接合に難はあるが、おおよそ同一個体とみてよいだろう。その他にも同一個体と思われる資料が出土している。21はバナリ焼で口縁が強く外反する器形をなす。

下之御庭・ほか地区的資料は22が中森式、23がバナリ焼、24は不明の土器である。22は中森式の壺形であろう。23はバナリ焼で底部から直に立ち上がる鍋形である。24は第一型式に類似するが、きわめて硬質である。底面には白色細粒がかなり多く付着する。

③ 涌田古窯跡

湧田古窯跡の調査のうち、警察棟地区（沖縄県教委1997）、行政棟地区（沖縄県教委1993）の土器をとりあげる。土器は警察棟地区からの出土がもっとも多いようで、土器の集中するグリッドもあった。第4図25～37が警察棟地区、第4図38が行政棟地区出土の土器である。

25～31は第一型式で、25～27、30・31が壺形、28・29が鉢形である。壺形の口縁形態は、25は頸部の形成が弱くてゆるく外反、26は頸部が直に伸びて口縁がゆるく外反する。30・31は壺の底部で、いずれもゆるく立ち上がる。28は資料が小さいため壺形の可能性もあるが、住屋遺跡（平良市教委1983）などで出土する浅鉢形のような器高の低い器形と考えておく。把手をもつものは25と29である。25は宮国元鳥遺跡（上野村教委1980）出土の壺形に似る。29は横耳状に成形する。

32・33はバナリ焼、34～37は中森式である。バナリ焼はいずれもゆるく外反する器形の壺形で断面がサンドウィッチ状。35～37は胎土や混和材、器面調整が類似する資料で、器面調整（ナデカケズリ）を行ったため混和材の粗粒が動いた痕がある。36・37は同一個体の可能性もある。37は接合がわずかなため下半部を推定線で示した。

38は第一型式で、小破片のため判然としないが28と似た器形だろう。

④ 小結

宮古式土器について少しまとめる。沖縄諸島から宮古式の出土する遺跡は管見のおよぶ分では20遺跡ほど¹⁰で、これらもほぼ第一型式が占めるように、ここで報告した宮古式で型式の判明するものは第一型式である。沖縄諸島の墓からは主に壺形、グスクや集落跡などは壺形に鉢形が伴う。報告したものも主に壺形で鉢形など他の器種が伴う点が共通する。宮古式の胎土はいくつかに分類されているが、沖縄諸島で出土する宮古式はざらざらした感じの砂泥質の胎土が多い。今回もこれに準ずる。時期の検討については省略する。

確実に第二型式といえるものはない。第1図10は混和材に白色粒（貝殻含む）や赤色粒を用いる点は他の第一型式に似ており、宮古式に含めてよい。尻並遺跡（埋文センター2003）のB類の土器と比較しても混和材などに類似が認められる。

表1 土器觀察一覧

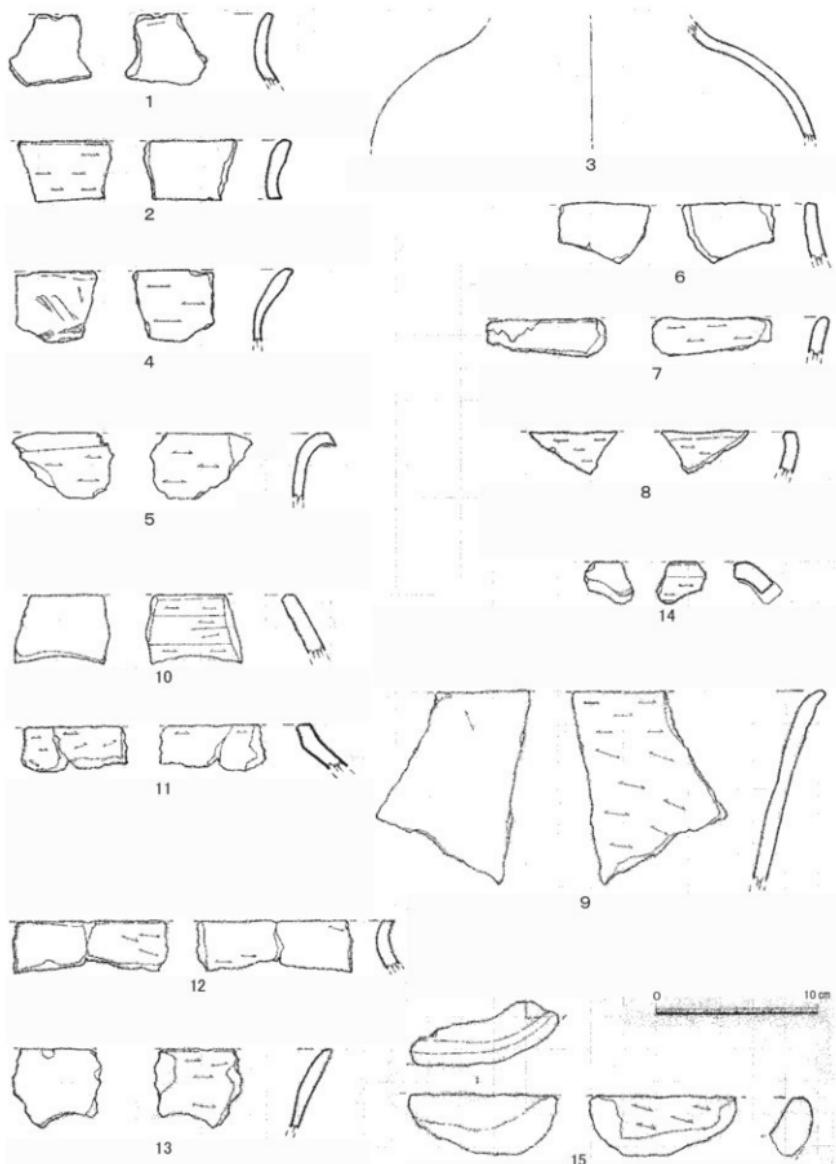
※「+」は接合を示す

図番号	区・層位	型式	器種／部位	大きさ(cm)	器面調整	胎土／混和材	色調	焼成	備考
第1図 図版1 1	J-26黒褐色土	宮古	壺／口縁	-	外面はミガキ、内面はナデ(口縁は横位のナデ)	砂泥質／白色繊維(多)、赤色粒	外:黒7.5YR2/1 内:橙5YR6/8	堅織	
第1図 図版1 2	H-22・23方形状造構 縦溜暗褐色	宮古	壺?／口縁	-	外面は横位のナデ(口向不明のナデ)	砂泥質／白色繊維、赤色粒	外・内:橙2.5YR6/8	良好	下側にした部分は平滑でこちらが口部の可能性もあり。
第1図 図版1 3	H-25暗褐色土層	宮古	壺／肩部	-	外面は全体的にミガキ、内面はナデ	砂泥質／白色繊維(多)、赤色粒	外:肩部は黒7.5YR2/1、胴部は明黄褐10YR7/6 内:橙5YR6/8	良好	
第1図 図版1 4	M-23黒褐色土下部	宮古	壺?／口縁	-	外面はヘラミガキ、一部にケズリ有り、内面はナデ	砂泥質／白色繊維(少々多)、貝殻含む)、赤色粒	外:黒10YR1.7/1 内:橙2.5YR6/8	良好	
第1図 図版1 5	J-28暗褐色土	宮古	壺?／口縁	-	内外ともナデで平滑	砂泥質／白色繊維(かなり多)、貝殻含む)、赤色粒	外:明赤褐2.5YR5/8 内:橙7.5YR7/6	堅織	頸き麗あり。
第1図 図版1 6	K-28暗褐色妙利腹 下部	宮古	鉢／頭部	-	内外とも方向不明のナデ	砂泥質／白色繊維(少々多)、赤色粒(多)	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/8	堅織	
第1図 図版1 7	H-28鍾混黑褐色土層 10-20	宮古	鉢／口縁	口径:14.4	内面は横位のナデ、外縁は摩滅	泥質／白色繊維(多)、赤色粒	外:に紫5盤7.5YR7/4(一部は明赤褐2.5YR5/8)	堅織	
第1図 図版1 8	H-H石列・下部南側 溝	宮古	浅鉢／頭部	-	内外ともナデで平滑、外縁はミガキ?	砂泥質／貝殻(多)、赤色粒、獸物繊維	外:褐灰7.5YR4/1(一部は橙7.5YR6/8) 内:灰黃褐10YR6/2	堅織	
第1図 図版2 9	H-28暗褐色混繩土 層上部	宮古	壺／口縁	-	外面はミガキ、内面はナデで平滑	砂泥質／白色繊維(少々多)、貝殻含む)	外:黒5YR2/1 内:橙7.5YR6/6	堅織	
第1図 図版2 10	J-24暗褐色土層	宮古	炉?／口縁	-	外・外面は方向不明のナデ、内面は凹凸ナデ?をナデ消し	砂泥質／白色粒(貝殻含む)、赤色粒	外・内:橙5YR6/8	堅織	第二型式か?
第1図 図版2 11	J-27溝状造構60	中森	壺?／口縁	-	内外ともナデ	砂泥質／白色粒(貝殻など:かなり多)	外:橙5YR6/8 内:暗灰褐2.5Y5/2	良好	
第1図 図版2 12	J-27鍾蓄下層褐色 土・J-26ビット14	中森	鉢／口縁	-	内外とも横位のナデ	砂泥質／白色繊維、石灰粒	外:橙5YR6/8 内:明黄褐10YR7/6	堅織	
第1図 図版2 13	西地区(出土地不明)	中森	鉢／口縁	-	外面は方向不明のナデ、内面は横位のナデ	砂泥質／貝殻片(多)、白色粒(多)、灰色粒	外・内:明赤褐2.5YR5/8	堅織	
第1図 図版2 14	西地区(出土地不明)	不明	火炉?／口縁	-	内外ともナデ	砂泥質／貝殻片、白色繊維、赤色粒(少)	外:橙7.5YR6/6 内:オーライト褐2.5Y4/4	堅織	
第1図 図版2 15	J-27西侧暗褐色 土	不明	鉢?／口縁	-	内外ともナデ	砂質／貝殻片(多)、赤色粒、白色繊維	外:に紫5盤2.5Y6/3 内:明黄褐10YR6/6	堅織	
第2図 図版3 16	せ-17黒褐色混繩土 層(100~130レベル)	中森	壺?／口縁	-	内外ともナデ	砂泥質／白色粒(多)、白色繊維(多)、灰色粒(少)	外・内:橙5YR6/8	堅織	
第2図 図版3 17	せ-17茶褐色混繩土 層(3層)	中森	不明／口縁	-	内外とも方向不明のナデ、口唇は平坦に形成	砂泥質／白色粒、白色繊維	外:明黄褐10YR7/6 内:黄褐7.5YR7/8	堅織	
第2図 図版3 18	せ-17Ⅱ階段横2列 右列下黒褐色混繩土 層(3層)	バナリ	壺?／口縁	-	外面はナデ、内面は柔痕残る	泥質／白色粒(少)、白色繊維(少)	外:橙5YR6/6 内:明赤褐5Y5/6	堅織	断面がサンドウツチ状。
第2図 図版3 19	せ-17Ⅱ階段横2列 右列下黒褐色混 繩土層	不明	壺／肩部	-	内外とも横位のナデ	砂泥質／白色粒、白色繊維	外:に紫5盤10YR7/4 内:橙7.5YR7/6	堅織	法吸?が付着する。

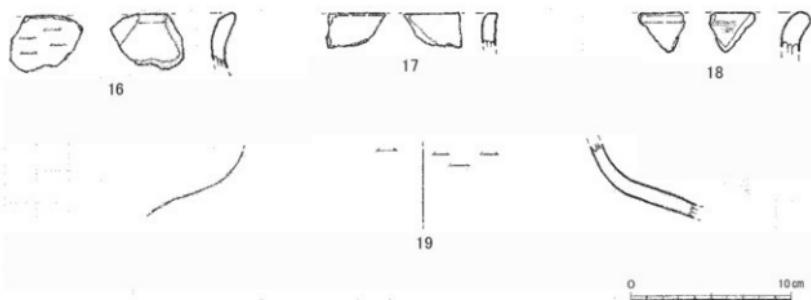
表2 土器觀察一覧

※「+」は接合を示す

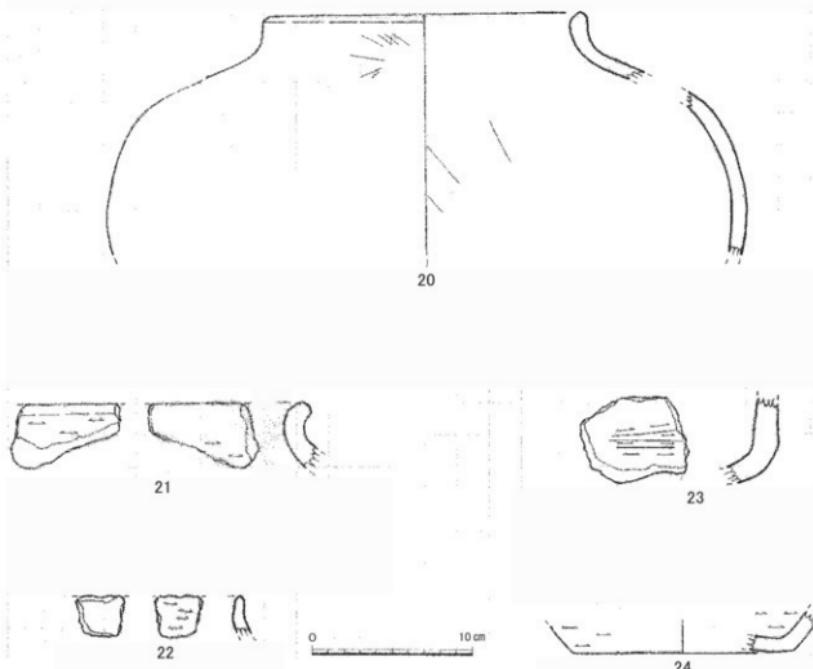
図番号	区・層位	型式	器種／部位	大きさ(cm)	器面調整	土質／混和材	色調	焼成	備考
第3回 国版4 20	E1 岩山埋土	宮古	壺?／口縁～ 肩部	口径:19.0	外面は工具による ミガキ、内面 は横位に工具 によるナデ?	砂泥質／白色細粒 (かなり多)、赤色粒 (多)	外:橙5YR6/6(一部は 黒2.5YR2/1) 内:明赤褐色5YR5/8	良好	
第3回 国版4 21	E1 岩山客土	中森or パナリ	壺?／口縁	—	内外とも横位の ナデ?	砂泥質／石灰粒 (多)、白色細粒 (多)	外:橙7.5YR6/8 内:明褐色7.5YR5/8	堅緻	
第3回 国版4 22	木曳門不明	中森	壺／口縁	—	外面はナデ、内 面は横位のナ デ?	砂泥質／貝殻片 (石灰粒含む)、赤 色粒(極少)	外:に紫、黄橙 10YR6/6 内:に紫、黄橙 10YR7/4	良好	
第3回 国版4 23	木曳門MO-142	パナリ	鉢／底部	—	脚下半に工具 によるナデ、底 面にナデ?	泥質／貝殻片(か なり多)	外:明赤褐色5YR5/8 内:赤褐色5YR4/8	良好	断面がサンドウイッ チ状。
第3回 国版4 24	黄福門北西	不明	壺／底部	底径:13.8	内外ともナデ?	砂泥質／白色細粒 (かなり多)、赤色粒 (少)	外:橙5YR7/6 内:橙5YR7/8	堅緻	
第4回 国版5 25	警察棟 ウ-16黒褐色 土層	宮古	壺／口縁～ 肩部	口径:13.6	全体的に荒れ ている、頭部に 工具によるナデ?	砂泥質／白色細粒 (かなり多)、赤色粒 (多)	外:黒2.5YR2/1 内:橙5YR6/8	良好	
第4回 国版5 26	警察棟 ウ-18屋敷 跡黒褐色土層	宮古	壺／口縁	—	内外とも方向不 明のナデ?	砂泥質／白色細粒 (かなり多)、赤色粒	外:外:橙5YR6/8	堅緻	
第4回 国版5 27	警察棟 タ-5黒褐色 土層 最下部石敷遺 構	宮古	壺／肩部	—	頭部に工具によ るケズリ、下半 にナデ?、脚部は ミガキ	砂泥質／白色細粒 (かなり多)、赤色粒 (少)	外:灰5Y5/1(一部は 橙5YR6/8) 内:橙5YR6/8	堅緻	
第4回 国版5 28	警察棟 ウ-18黒褐色 土層	宮古	鉢／口縁	—	口縁内外にナ デ、頭部にミガ キ	砂泥質／白色細粒 (かなり多)、赤色粒 (少)	外:橙5YR7/6(一部は 黒5Y2/1) 内:橙5YR6/6	堅緻	
第4回 国版5 29	警察棟 ウ-18屋敷 跡黒褐色土層	宮古	鉢／肩部	—	内外とも方向不 明のナデ、把手 部は粗いナデ?	砂泥質／白色細粒 (多)、赤色粒	外:黒褐10VR3/1 内:橙7.5YR7/6	堅緻	
第4回 国版5 30	警察棟 ウ-18黒褐色 土層	宮古	壺／底部	底径:11.2	内外とも方向不 明のナデ?	砂泥質／白色細粒 (多)、赤色粒	外:灰黒褐10YR5/2 (一部は黒10VR2/1) 内:に紫、黒 7.5YR7/3	堅緻	
第4回 国版5 31	警察棟 セ-8淡褐色 土層	宮古	壺／底部	底径:14.0	外面上はミガ キ、内面は立 ら上位の部に指 印オサエ、下位は ナデ?	砂泥質／白色細粒 (かなり多)	外:黒5Y2/1 内:明黃褐10YR6/6	堅緻	
第4回 国版6 32	警察棟 セ-8淡褐色 土層	パナリ	壺／口縁	口径:10.0	内外ともナデ、 内面の一部に 指印オサエ	泥質／白色粒(か なり多)	外:明赤褐色2.5YR5/8 (一部は黒褐5YR2/1) 内:明赤褐色2.5YR5/8	堅緻	断面がサンドウイッ チ状。
第4回 国版6 33	警察棟 ウ-15最下 部遺物 蘆葦黒褐色 土層	パナリ	壺／口縁	—	内外とも横位の ナデ?	泥質／白色粒(多)	外:明赤褐色5YR5/8	良好	断面がサンドウイッ チ状。
第4回 国版6 34	警察棟 ツ・テ-3・4 黒褐色土層	中森	不明／口縁	—	内外ともナデ?	砂泥質／白色細粒、 褐色粒	外:明褐色7.5YR5/6	良好	
第4回 国版6 35	警察棟 セ-8淡褐色 土層	中森	鉢／口縁	—	内面はナデ、外 面はナデ?、内面 は指印オサエ、口縁 部に工具による ケズリ	砂泥質／貝殻片 (多)、白色粒(多)	外:褐7.5YR4/4 内:明赤褐色2.5YR5/8	堅緻	外面上にスカ付着。 35~37まで始土な どの質感が類似す る。
第4回 国版6 36	警察棟 セ-7淡褐色 土層	中森	鉢／口縁	—	内外とも工具に よるケズリ?	砂泥質／白色粒 (多)、貝殻片	外:褐7.5YR2/1(一 部は暗褐色10YR3/4) 内:赤褐色5YR4/8(一部は 黒褐10VR3/1)	堅緻	36~37は同一個体 の可能性もあり。
第4回 国版6 37	警察棟 セ-7淡褐色 土層	中森	鉢／口縁～ 肩部?	—	内外とも工具に よるケズリ?、内 面脚部は強 いナデ?	砂泥質／白色粒 (多)	外:黒褐10YR3/1 内:赤褐色5YR4/8	良好	脚部の接合はやや 脆弱のため波羅で記した。
第4回 国版6 38	行政棟 セ-44 第1	宮古	鉢／口縁	—	外面上はミガキ、 内面はナデ?	砂泥質／白色細粒 (多)	外:黒7.5YR2/1 内:橙7.5YR6/8	堅緻	



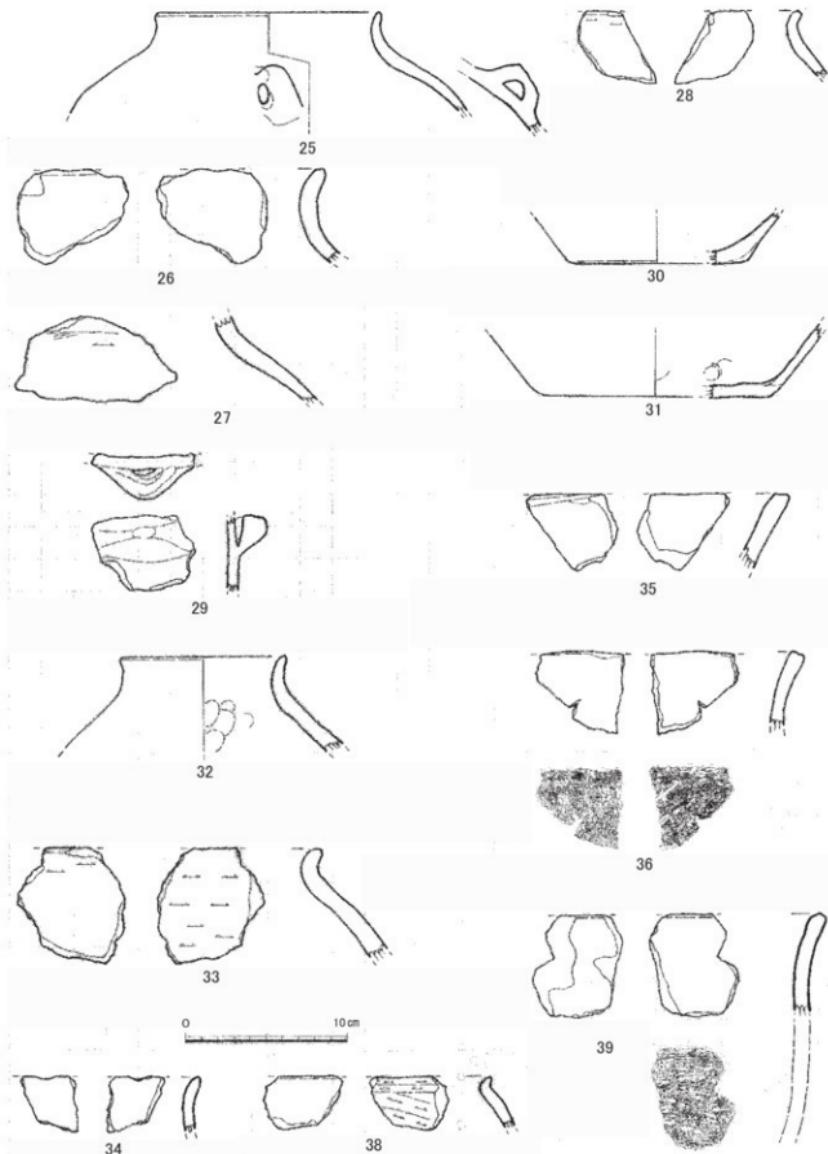
第1図 天界寺跡（西区）出土の土器



第2図 天界寺跡（東区）出土の土器



第3図 首里城跡出土の土器



第4図 湘田古窯跡出土の土器



図版1 天界寺跡西区出土の土器（1）



図版2 天界寺跡西区出土の土器（2）



図版3 天界寺跡東区出土の土器



図版4 首里城跡出土の土器



図版5 湘田古窯跡出土の土器（1）



図版6 湘田古窯跡出土の土器（2）

3. 報告資料の追加・訂正

筆者が報告書で関わったもののうち、次の2点について資料の追加・訂正を行う。

① ヤッヂのガマ

報告書（埋文センター 2001c）の厨子の項目で土器をあげたが、分類基準の記載を漏らしていた。土器の分類は、まず器形で次のとおり2つに大別した。

A：器高が胴の最大径より低いもの、

B：器高が胴の最大径よりも高いもの

そして、口縁部の形態で次のとおり3つに細分した。

a：頸部が直に立ち上がり口縁がゆるく外反するもの

b：頸部が短く口縁がゆるく外反するもの

c：頸部を形成しないもの

報告書では器形と口縁部の形態を組み合わせた分類を示した。

報告書第 58 図 8 の鉢形（報告書では鍋形）を厨子の項目で掲載した。この土器は土中（崩落した石灰岩が堆積した部分）からの出土で、骨が入っていたわけではない。口径は 23.4 cm で、厨子としてあつかった壺形とかわらないが、器高は 20 cm 前後と推算でき、納骨のための容器としては大きくな。そのため、厨子ではないと考えられる。同図 5 も骨を納めていたわけではないが、区画内出土であることやある程度の大きさがあるため厨子と考えてよいだろう。

同図 10 で不明とした土器はバナリ焼とする。カンジン原古墓群でバナリ焼を 1 点（4 号墓）と報告したが、宮古式として集計した中に 1・6 号墓に中森式が各 1 点ある。また、4 号墓に宮古式の底部を 1 点追加（4 号墓の宮古式は計 2 個体）する。さらに追加。ヤッヂのガマ奥側洞穴部分からグスク土器（後期土器を含むか）と思われる土器胴部片が数点あった。

② 新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡

報告書（埋文センター 2002a）で土器は、胎土で I 類：砂泥質のもの、II 類：泥質のもの、III 類：その他とした。I～III 類とも多くが第一型式に含まれ、I・II 類の中に第二型式、III 類の中に野城式土器⁵¹を確認した。

新里元島上方台地遺跡で第二型式は明確な資料を確認できなかったが、新里東元島では報告書中第 58 図 6・8 が第二型式である。図・写真では明瞭でないが、内面に回転台による調整の痕がのこる。

III 類のうち外耳を貼付した資料とセンター収蔵の資料と比較したところ、報告書第 39 図 4～6・8 は野城式に比定してよい土器である。こちらは上方台地遺跡からの再確認である。

注事項

- 1) 宮古式土器は安里による設定（安里 1975）、中森式土器は高宮による設定（高宮 1981）の土器型式とした。バナリ焼は島袋（2005）などを参考にした。その他の土器は宮古式や中森式に胎土などが似るものそれらとは異なる土器とした。型式判定にあたっては金城亀信氏、新垣力氏からご教示いただいた。
- 2) 器種の推定ができる資料が少ないため、壺形以外と思われる広口の器種の一部は仮に鉢形とした。また、ここでいう鉢形は住屋遺跡（平良市教委 1983）で報告する浅鉢形も含む。埋文センター（2002a）で報告した鉢・鍋形も鉢形とまとめておく。埋文センター（2002b）で発見した壺形と報告した資料（第 54 図 5）は第 1 図 10 に器形が似るためが形とする。
- 3) 回転台・ろくろの定義は佐原（1972 など）に詳しい。詳述すると煩雑になるため、ここで用いる回転台は「製作する土器（うつわ）を回転させるためのせる台」と大雑把な定義にしておく。

※ 佐原（1972）はG・M・フォスターの訳文（「土器の話（9）」として『考古学研究』19-1 所収）。

4) 遺跡数は報告書などで確認したもの。報告のない古墓などを含めればこれ以上である。

5) 野城式土器は下地が設定（下地 1978）したものとし、高腰城跡（城辺町教委 1989）の土器と比較した。

引用・参考文献 ※文中で沖縄県立埋蔵文化財センターは埋文センター、教育委員会は教委と略記

安里 進 1975『沖縄陶器等の影響を受けた宮古式土器について』『やちむん』5 やちむん会

上野村教育委員会 1980『宮国元島遺跡』

沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡』I

沖縄県教育委員会 1997『湧田古窯跡』III

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a『天界寺跡』I

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b『首里城跡－下之御庭・ほか地区－』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c『ヤッチのガマ カンジン原古墓群』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002a『新里元島上方台地遺跡 新里東元島遺跡』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002b『天界寺跡』II

沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『尻並遺跡』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－書院・鎖間地区－』

城辺町教育委員会 1989『高腰城跡』

島袋綾野 2005『「バナリ焼のイメージ」を考える』『沖縄文化研究所所報』57 沖縄文化研究所

下地和宏 1978『野城（ぬぐすく）式土器について』『琉大史学』10 琉球大学史学会

高宮廣衛 1981『編年試案の一部修正について』『南島考古』7 沖縄考古学会

平良市教育委員会 1983『住屋遺跡（俗称・戸間）発掘調査報告』

付編1 阿良東遺跡の試掘調査で出土した土器

①調査の概要および出土遺物

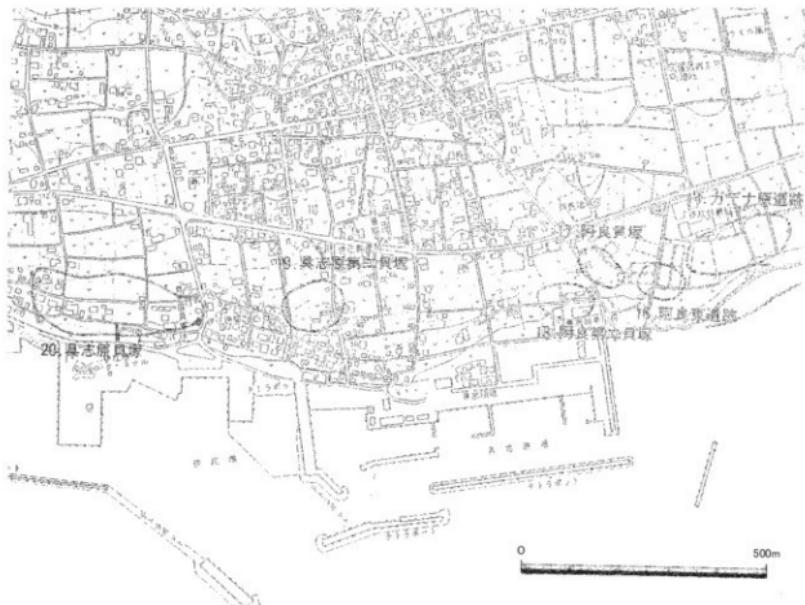
2009年7月28・29日に阿良東遺跡において、建物建設に伴う試掘調査を実施した。阿良東遺跡は伊江島南東部に所在する砂丘遺跡である。試掘場所は公園になっている地点において、試掘坑を7ヶ所設けて調査を行った。このうち6ヶ所は掘り下げ後すぐに岩盤を確認したり、2m近い搅乱層であった。遺物包含層は公園のほぼ中央の試掘坑で確認（第6図）し、土器、石器、貝製品、貝類が出土した。土器は高宮編年前期から同後期の土器が混在するが、第7図5が包含層の最下層から出土したため高宮編年後期の遺物包含層と判断した。

ここでは出土した遺物のうち土器をとりあげる。回収した遺物のほとんどは重機掘削で掘り上げた上から採集したものであるが、すべて遺物包含層から回収した土から採集した。

出土した土器は第7図で、1～3は前期土器、4は後期土器、5は弥生系土器である。前期土器では室川式土器と宇佐浜式土器、後期土器は大当原式土器である。以下、遺物の詳細を述べる。

1は室川式で、口縁が弱く開く深鉢形で口縁はわずかに肥厚する。西長浜遺跡分類（埋文センター）のB2（イ）にあててよいだろう。焼成は良好で、胎土は砂質、混和材に石灰岩粒、粘板岩、石英を多く含む。器面調整は不明。色調は外面が明赤褐（2.5YR5/8）、内面は橙（7.5YR6/8）である。

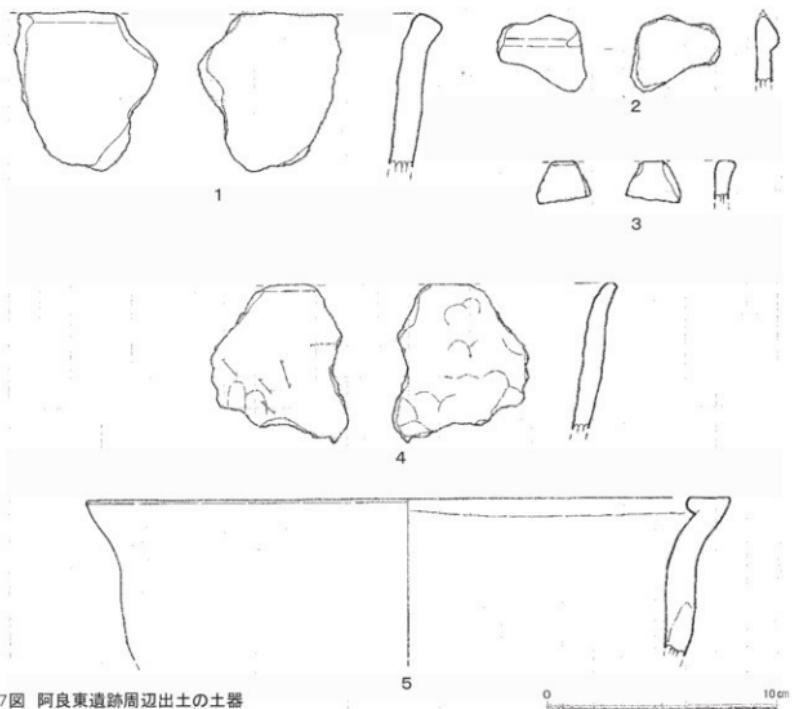
2は宇佐浜式で、資料が小さいため器種は不明、口縁肥厚部の形成は弱い。焼成は良好で、胎土は砂質、混和材に石灰岩粒などの細粒を含む。器面調整は不明。色調は外面が赤褐（2.5YR4/6）、内面は明赤褐（2.5YR5/8）である。



第5図 阿良東遺跡周辺（伊江村教育委員会 1999 より）



第6図 試掘箇所（伊江村教育委員会から提供の図を用いた）



第7図 阿良東遺跡周辺出土の土器



図版7 阿良東遺跡周辺出土の土器

3は型式、器種不明の前期土器である。焼成は良好で、胎土は砂泥質、混和材に石灰岩粒などの細粒を含む。器面調整は不明。色調は内外とも明赤褐（2.5YR5/8）である。

4は大当原式で、口縁が弱くハの字に開く深鉢形である。焼成は良好で堅緻、胎土は砂泥質で、混和材に褐色粒を含む。器面調整は外側ともナデを施し、内面は指頭痕が残る。色調は外側が赤褐（5YR4/6）、内面は明赤褐（2.5YR5/8）である。

同図5は弥生系土器¹⁾で、包含層の最下部（岩盤直上）から出土と確認できた。口縁部を内側に張り出して逆L字状に形成する甕形で、口径は24.1cmである。口縁は内側へ折り返して成形する。器面調整は不明。焼成は良好で、胎土は砂質、混和材に赤色粒などの細粒を含む。色調は外側が橙（5YR6/8）、内面は橙（5YR6/6）である。胎土や色調は浜屋原式に近く、当該期の在地土器だろう。

②これまでの調査との検討

阿良東遺跡、阿良貝塚では数回の調査が行われて、阿良東遺跡では高宮編年前期の包含層（伊江村教委1999）²⁾、阿良貝塚では同後期の包含層（沖縄県教委1983・伊江村教委1999）を確認した。

阿良貝塚の調査では後期土器として浜屋原式や大当原式、弥生土器が出土した。今回の調査で出土した土器は大当原式や弥生系土器を含むことから、確認した包含層は阿良貝塚の延長部分とみておく。

注事項

- 1) この資料について、宮城弘樹氏、安座間充氏からご教示いただいた。試掘場所の地図は伊江村教育委員会から提供いただいた。
- 2) 阿良東遺跡の97年調査地点（包含層を確認した試掘坑）は第6図に記入した。出土資料を再確認したところ、大当原式土器（報告書第32図23・24など）が少量あった。1982年の試掘調査（安里・ほか1984）ではアカジャンガーワなどの後期土器が攪乱層から出土した。

引用・参考文献

- 安里嗣淳・大城秀子・花城潤子 1984「伊江島阿良東遺跡の試掘調査」『紀要』1 沖縄県教育委員会文化課
伊江村教育委員会 1999『伊江島の遺跡』
沖縄県教育委員会 1983『阿良貝塚』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『西長浜遺跡』

付録2 天界寺跡出土の銭貨

2009年度に実施した企画展において、展示資料の一つとして天界寺跡から出土した「金圓世寶」をとりあげようと考えたが、資料に難ありと判断して展示は行わなかった。その顛末を記す。

天界寺跡西区の報告で、「金圓世寶と思われるものが1点出土した」とある。図等の掲載がないため資料の確認¹⁾を行ったところ、資料整理時に作成した遺物集計カードのメモに「□圓□寶」とあり、これから金圓世寶と推定していた。文字は摩滅のため判読は難しいが金圓世寶の「圓」にあたる部分をそのようにみなしたものだろう（図版8）。しかし、これが金圓世寶かはっきりしないことから展示は見送った。

その後、この資料を確認するため糸満市佐慶グスク（糸満市教育委員会1994『佐慶グスク・山城古島遺跡』）出土資料や書籍等掲載の資料との比較、センターにてX線撮影（図版9）を行った。

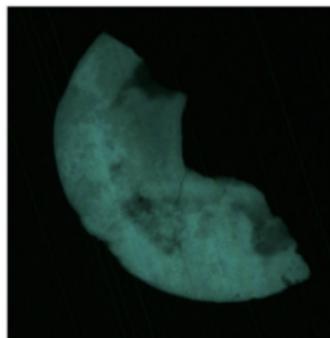
X線でははっきりとしないが、佐慶グスク資料との比較では両者は明らかに異なっていた。大きさはほぼ同じであるが、佐慶グスク資料は厚みがあるのに対して、天界寺跡資料は「くにがまえ」よりもルーベ観察で「しんによう」に近いと判断できた。「しんによう」であれば「通」の可能性がある。そのため、天界寺

跡資料は「圓」と誤読していることから、「□□□寶」（または「□□通寶」）の不明銭とする方が適当である。今回の確認によって、天界寺跡出土の資料は金圓世寶でないことが考えられる。以後、この資料については留意してほしい。

今回の報告にあたって、佐慶グスク出土銭の実見は糸満市教育委員会湖城清氏、大城一成氏に、X線撮影はセンターの知念隆博氏にお手間をおかけしました。ありがとうございます。



図版8 天界寺跡出土の「金圓世寶」



図版9 「金圓世寶」のX線写真

注事項

1) 同資料が入っていた袋に記してある遺物の通し番号と、遺物を集計した一覧表へ転記した番号が異なっていた。そのため、各資料を検討し、これ以外に金圓世寶とした資料のないことを確認した上で該当する資料と判断した。

後記

土器の実測、図版作成といった一連の作業を行うのは久しぶりであった。実測図などあやしい点はお許しいただきたい。また、資料室の皆さんへは作業中にも関わらず色々とお手数かけました。いつもながらご協力ありがとうございます。

今回の報告は原稿執筆にあたっての反省からきたものである。一旦報告したものではあるが、不足する部分、訂正する部分があったことをお詫びいたします。

(にしめ あきら：西原高等学校)

紀 要

沖縄埋文研究 7

発行年月日 2012 年（平成 24）年 3 月 30 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193 番地の 7
TEL : 098-835-8751 FAX : 098-835-8754

印 刷 株式会社 近代美術
〒 901-1111 沖縄県島尻郡南風原町字兼城 206 番地
TEL : 098-889-4113

BULLETIN
OF
THE ARCHAEOLOGICAL STUDY OF OKINAWA
No.7

Original Articles

Manners of Acquisition and Consumption in Materials for Stone Tool Observed at the Anchinoue Shell Mound,
Sesoko Island, Okinawa; Circulation of Materials for Stone Tool in the Prehistoric Okinawa Islands

.....OHORI,Kohei (1)

The Utilization of Stone Materials in the Phase of the Tsumegatamon-style Pottery

- Redefinition and Evaluation of the Noguni-type Stone Adze -OHORI,Kohei (15)

Report on the Excavated Materials

About the Direction for the Edible Vessel of Little Bird; The Archaeological Finds in the Shuri Castle Site and the
Sites of the Shuri Castle NeighborhoodNAKAZA,Hisayoshi (29)

Poterys Unearthed from Tenkai Temple Site and Other SitesNISHIME,Akira (41)



2012

OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER